

ベノ・ヴァーレン(1995/99)『日常的地域化の社会地理学 —— 社会と空間の存在論について ——』の紹介

森 川 洋*

Die Vorstellung des Buchs von Benno Werlen “Zur Ontologie von Gesellschaft und Raum”

Hiroshi MORIKAWA*

目 次

- I. はしがき
- II. 『社会と空間の存在論について』の内容紹介
- III. 本書を読んで—むすびにかえて

I. はしがき

本稿の目的は、最近のドイツ社会地理学における注目の書、ヴァーレン著『日常的地域化の社会地理学』第1巻(Werlen, 1995/99)の内容を紹介することにある。本書は1995年に刊行されたが、1999年には第2版が内容やスタイルを若干修正し、書名も『社会と空間の存在論について』に変更して刊行された。著者によれば、本書(第2版)ではとくに伝統的生活様式と近代末期の生活様式の説明——理想的タイプの構築と方法論——をより明快なものにしたという¹⁾。

筆者は先に第2巻(Werlen, 1997)を紹介しており(森川, 2000)、本稿はその作業の一環をなすものである。第1巻・第2巻の紹介が前後し、先に紹介した第2巻には誤解や訳語の不統一も含まれるので、修正したものをいづれまとめて報告したいと考えている。なお、本書の内容はきわめて難解なため、ここで紹介するのは筆者が理解しえた部分にとどまる。

* 福山大学経済学部; Fakultät für Wirtschaftswissenschaft der Universität Fukuyama

II. 『社会と空間の存在論について』の内容紹介

第2版への序言

社会地理学は、その創立以来社会関係を地図や空間的カテゴリーを用いて説明することを目的としてきた。そこでは、社会を空間的に説明するにはいかなる前提が必要なのか、その前提が与えられることなく現実を説明するとすれば、いかなる解釈が捨象されることになるのか、といったことが問題となる。この前提が日常世界の中で与えられないときには、社会的現実の空間的説明は不十分なものとなる。社会文化的現実を空間的カテゴリーを用いて均質なものとして説明する従来の方法は、今日ではもはや社会存在論的基盤を失ってきている。本書ではこうした問題に対して批判的な考察を加えるが、詳述は第2巻で行う。

序言（第1版）

地理学は、地球の発見など近代社会の成立にとってはきわめて重要な役割を果たしてきた。しかし、地理学の世界観は自己流であり²⁾、地理学では社会と空間関係の変化についての認識が乏しかった。今日の生活条件のグローバル化のもとでは、近代的な生活内容の考察にとって不適切な点が増大したにもかかわらず、新たな発想は現れなかった。そうした状況のもとで、社会地理学、文化地理学、経済地理学の現実説明にとって時宜をえた解答を用意しようとするのが本書の狙いである。

本研究へ着手したのはおよそ7年前、空間的言語を用いて社会文化的事実を説明しようと考えたときに生じた疑問に始まる。それを解明するには、社会概念や空間概念のより詳細な再構築が必要と考え、それぞれの言語の意味について詳しく分析した。その最初の成果は、1988年秋ザルツブルクで開催された「第1回地理学・社会理論におけるイギリス・オーストリア・セミナー」において発表した。このセミナーにはグレゴリー (Gregory, D.) やスリフト (Thrift, N.)、マッツネッター (Matznetter, W.)、バーレンベルク (Bahrenberg, G.)、オーセンブリュッゲ (Oßenbrügge, J.) らが出席しており、これらの出席者からは批判とともに大きな激励を与えられた。この最初の段階においてすでに、ギデンズ (Giddens, A.) の構造化理論 (Strukturationstheorie) は研究の重要な枠組みをなしていた。ギデンズ以外のグラント・セオリーのなかには、社会的現実の説明において空間と時間にそれほど深く注目したものはなかった。

1989～90年の1年間スイス政府の資金によりケンブリッジ大学のギデンズのもとに滞在し、彼の社会理論の思想をより深く考察する機会をえた。ギデンズは種々の存在論をまず典型的に説明したが、当時彼が『近代の結果』(ギデンズ, 1993)の執筆を終えた直後で

あったのも幸いであった。とくに伝統的社会や前近代的空間概念の存在論と近代社会・近代的空間理解の存在論との関係に関する考察は、ヴァーレンの研究にとってきわめて重要であったからである。1991年にマイアミで開催されたアメリカ地理学会での「空間なき人文地理学は？」と題する空間概念の論議も³⁾、本研究にとって貴重なものとなった。

この「序言」の末尾には、ヴァイヒハルト (Weichhart, P.), ポール (Pohl, J.), ベック (Beck, U.), ラウクス (Laux, D.), ヴァルデンガ (Wardenga, U.), アイゼル (Eisel, U.), ゼトラチェク (Sedlacek, P.), ハルト (Hard, G.), バーレンベルクに対する謝辞がある。

はしがき

今日のポダレス経済のもとでは、文化・社会・経済的空間としての国は崩壊に向かっている。行為主体は消費の分野では世界市場と密接に関係し、政治レベルにおいては1990年代にはリージョナリズムが台頭し、従来の国民国家としての秩序を揺るがすこととなった。しかし、こうした社会現象を解明する地域関係の科学としての地理学の貢献は、社会学に比して乏しいものであったといわざるをえない。

1) 地域関係から日常的地域化へ

空間科学の研究目的は、社会文化的な均質的空間類型や地域間結合によって区分された地表空間の間仕切り (erdräumliche Kammerung) を発見することにあつた。そうした研究は、1960年代・70年代の計量・空間科学革命においてはバンジ (Bunge, W.) やベリー (Berry, B. J. L.), チョーレイ (Chorley, R. J.), ハッグゲット (Haggett, P.) らによって主導され、ドイツ語圏においてはバーテルス (Bartels, D.) によって改良がなされた。バーレンベルクらもその発展に貢献した。こうした研究が、地理学専攻の卒業生に対して教師以外に空間計画や空間整備政策などの新たな職業分野を開いたことは1つの大きな貢献であったといえる。しかしそうした研究は、地表にみられる物的事実だけを研究調査の対象とし、非物質的・主観的な自己認識の内容や社会規範、文化的価値については調査しえないところに問題があつた。テリトリーは文化的アイデンティティ形成にとって重要な役割を果たすものと考えられるが、空間や自然的条件によっては決定されない文化的関係や社会的関係は、地表に立地するものとしては理解されなかつた。

本書で論ずる目的は、地理学的な文化研究や社会研究における従来の文化や社会関係に関する空間中心的な発想を、社会・文化が本質的に備えている空間的条件の解明に置き換えることである。つまり、従来の社会指向の空間研究から地理学的な社会研究へと視点の転換をはかることを意図したものである。たとえば、文化的アイデンティティについてみると、その空間中心的な研究から文化的アイデンティティの地域条件の説明へと関心を移

させようとするものである。その場合に、地域化とか地域形成 (Regionalisierungen) というのは、地域や空間類型の科学的な設定を問題にするのではなく、地域形成の日常的プロセスを科学的に分析することである。

こうした意味において、計量革命は地理学研究の用具や方法の改善には貢献したが、研究対象自体の改善を目的としなかったため、半革命 (部分革命) に終わったといえる。ここでは、「空間」が依然として地理学の研究対象にとどまり、空間法則を発見しようとする意図には新鮮さがみられたが、伝統的地理学と変わらない部分が多かった。

地理学の完全な近代化にとっては、その研究関心が近代や近代末期の生活条件に適合した実態説明に向かう必要があり、社会や行為、空間関係に対する説明がより重要なものとなる。その際には、地理を生産する主体的行為に注目しなければならない。

2) 社会と空間

伝統的な社会地理学においては、体系的な社会概念が欠如していた。従来の伝統的な社会地理学においても理論形成は重視されていたが、1990年代になると突如として社会哲学や社会政策問題との関係が緊密なものとなった。存在論的社会理論に基づく「地域化 (地域形成) の社会地理学」の説明は、社会理論的にも政策的にも妥当なものとなり、その実証研究は緊急の社会問題においても長期的問題においても、政策に大いに貢献するものと考えられる。日常的な地域化は主体的行為によって行われるので、社会地理学の研究方法は行為科学 (Handlungswissenschaft) の方法論に基づくべきである。社会地理学は空間科学や自然科学の方法論によるべきではない。

3) 各章の構成と要約

第1巻・第2巻の章構成をまとめて示すと、第1表のようになる。第1巻の第1章では社会概念を正確に定義する。空間概念の使用においては、社会に注目すべきである。社会

第1表 ヴァーレンの著書『日常的地域化の社会地理学』第1巻と第2巻の章構成

第1巻『日常的地域化の社会地理学—社会と空間の存在論について—』(Werlen, 1995/99)
I 社会的事実の存在論について
II 伝統的社会と近代末期社会
III 前近代空間
IV 近代空間
第2巻『日常的地域化の社会地理学—グローバル化, 地域, 地域化—』(Werlen, 1997)
I 地理学と地理形成
II 地域と学問的地域化
III 「新しい」地域地理学
IV 社会的な地域化の創設
V グローバル化と地域化
VI グローバルに地域化された生活世界

出所: Werlen (1995/99, 1997) の各目次より筆者作成。

科学においては、ギデنزの構造化理論の中で社会・空間関係の説明に努力したので、英語圏における人文地理学の論議においては構造化理論が主要な研究対象となった。とはいえ、新興の地域地理学 (new regional geography) の研究においては⁴⁾、地理学的空間理解を急いで修正しようとはしなかった。つまり、社会学的社会理論を単純に空間化しただけで、それに続く社会生活の空間的成分を改めて考え直そうとはしなかった。そこでは、明確に規定された社会に対する考え方が欠けていた。たとえば、プレッド (Pred, 1985) は「社会的なものは空間的で、空間的なものは社会的だ」と主張した。それはラントシャフト地理学 (Landschaftsgeographie) の発想に基づくもので、それ以後の社会理解の考え方が導入されているとはいえない。社会科学により妥当な地理学にとっては、社会理論を空間の上に適用することでもって満足するのではなく、空間的成分を社会理論の中に体系的にとりこみ、空間を社会的カテゴリーを用いて新たに考えることが必要である。

第2章では、今日の社会の特徴を伝統的社会との関連において考察する。存在論の説明とは、伝統的社会と近代末期社会における行為主体の社会的存在様式 (soziale Seinsweise) の説明を意味し、そこでは模式的な説明が行われる。伝統的社会の特徴は時空間的な安定性であり、ギデنزのいう定着性 (embeddedness, Verankerung) があった。今日では、社会文化的条件と空間的条件や時間的経過とは明確に分離しており、人々は行為の上でそれぞれ多様な様式をもち、各個人は以前とは異なった新たなかたちで相互に結合している。したがって今日の社会生活では、高度な自己意識や自己管理が要求される。そこでは、常に新たな知識を導入し、個人の高度な決定能力が要求される。そうした近代生活における時空間的な脱定着化 (disembeddedness, Entankerung)⁵⁾ からみて、地理学に対する批判者は「地理学は以前には重要だったが、今日ではもはや重要ではなくなった」という⁶⁾。しかしそれとは逆に、以前は多くの人たちが相互にそれほど依存しながら生活していなかったし、お互いの決定に関与することもなかったため、今日では以前にもまして地理学は重要であるとみることもできる。今日の生活においては、自己の居住地とともに、グローバルな関係についても詳しく知ることが要求される。そこでは主体の行為が重要であり、空間が最も重要な問題であるとはいえない。

こうした背景において、本書の最後の2章で空間の存在論について論ずる。空間は行為の説明にとっていかなる意義をもつのか、社会概念と空間概念が方法論的に相互にいかに関連しているのかについて考察する。この論議の第1の目的は、行為理論に適合した空間概念の構築にあるので、地理学者の古典的空間概念に対して批判的な検討がなされる。そのなかでは、種々の哲学者が提示した空間概念をとりあげ、それでもって最終的には、明示的にも暗示的にも、空間概念に関係する科学的地理学——空間科学的論議 (ヘットナー

(Hettner, A.) とバーテルス) や解釈論 (ポール (Pohl, J.) ら) および現象学的論議 (ピックルス (Pickles, J.) ら) など——の形而上学的基盤が正しいかが検討される。

第3章でみられるアリストテレス, デカルト, ニュートンらの前近代的な具体的な空間概念に関する説明では, 空間に対する疑問に続いて実体空間 (substantialistischer Raum) の定義について述べる。それらは具体的な空間の存在を思わせる。しかし, 空間を研究目的とする場合には, 空間の中で空間の場所を定めることが必要となり, 現実にはそれは不可能な問題となる。それにもかかわらず, ライプニッツが関係空間 (relationaler Raum) の考え方をもって最初の反逆をとるまで, 哲学や物理学の歴史の中では実体空間の概念は長期にわたって保持されてきた。関係空間は, 空間のもつ因果的作用を厳しく否定したものである。興味深い。

第4章は近代的空間概念について検討する。カントは空間問題を扱い, 絶対概念と関係概念の間の争いは回避できないものと考え, 認識論によってその問題を解決した。カントによれば, 地理学は——歴史学とともに——学問の前座を占める予備的 (前座的) な学問 (wissenschaftliche Propädeutik) である。第4章の末尾には, この空間論争の成果を「日常的地域化の行為中心的社会地理学」に照らして論じている。その結果は, 上述のように, 科学的地理学にとっては人間行為が研究対象の中心を占め, 空間は研究目的ではないという結論に到達する。空間は行為者の身体的経験に根ざしたものである。社会地理学は行為科学と考えられる。その関心は行為プロセスにあり, 行為プロセスは行為関係の空間性 (Räumlichkeit) や社会生活に対する影響からなるとする。

第2巻では伝統的地理学や空間科学的地理学に対して, 新しい「日常的地域化の社会地理学」を紹介する。それは行為理論的社会地理学の目標から生じたもので, 現在の地域地理学を少なくとも補完する位置にある。第2巻では, ハルトケ (Hartke, 1956, 1962) の「地理形成 (Geographie-Machen)」に関する原初的な概念を紹介した後, 伝統的地理学, 空間科学的地理学と行為理論的地理学について考察する。それとともに, ドイツ語圏や英語圏の地理学にみられる新たな地域地理学の発展に関する最近の論議を体系的に紹介し, 批判的に検討する。新しい地域地理学にとっては, 時宜にかなった社会存在論に基づくことが必要である。その点では, ドイツ語圏に比べて英語圏の方が発展している。その論議の出発点には, バティマー (Buttimer, A.) やレイ (Ley, D.) らの現象学的立場とグレゴリー, プレッド, スリフトに代表される構造化理論的立場とがある。第2巻の最後の2章では, 「日常的地域化の社会地理学」に関する理論的基盤の展開がみられる。それは, 地理学が前座的立場や空間的法則の追究でもって満足することなく, 健全な人間理解を追究する学問的位置に返り咲くことを目標とするものである。

第1章 社会的事実の存在論について

1) 存在論に関する種々の見解

社会哲学や社会科学にとって存在論 (Ontologie) の考察は重要であるが、これまでの地理学ではそれに対する明白な説明が欠けていた。存在論とは存在様式 (Seinsweise) であり、通常は分析哲学とハイデッガーの实在論哲学とに2分される。ポパー (Popper, 1973) は物的、精神的、社会文化的な3つの異なった存在様式を区別するのに存在論を用いたが、その場合には、単に人間の存在様式だけでなく、3世界がいかにより異なるかが問題となった。いかなる様式でもって社会的事実が存在しているのか、それはいかにして科学的に調査されうるのか、社会は単に物的条件の表現であるのか、また社会の変化については物的基盤の変化だけで十分なのか。ポパーの存在論は認識論的見地から規定されるが、実存主義では認識論に依存しない。ハイデッガーは存在を人間存在という意味に限定して捉え、種々の社会形態のなかで人間の社会的存在について考察する。ギデنزの「近代的存在論」は、ハイデッガーの「近代社会における人間の存在様式」による。

2) 全体主義と個人主義

社会の存在様式に関する論議は、これまで全体主義と個人主義の差異について行われてきた。その代表として重要なのは、ギデنزの構造化理論とエルスター (Elster, J.) の分析的マルクス主義 (analytischer Marxismus) である。

ところで、全体主義は社会学の歴史と密接な関係にある。全体主義はマルクス主義や機能論、構造論、システム理論などのアプローチにおいて、今日まで現実の理論的考察に用いられてきた。その特性は次の4点にまとめられる。①社会はその構成員の総計以上のものであり、②構造的要因は行為者に対して制約的にのみ作用し、超個人的なものであって、③構造は個人の目的や特性とは無関係に分析されるが、④構造概念は人々が割り当てられた社会的地位やその間の関係に関わる。しかしギデنزは、これらの特性が構造化理論の基本線には適合しないと考え、全体主義のアプローチには反対する。その理由として、①構造は強制とみられる。②社会の多様な構造的要因が人間行為の主體的側面とは無関係に説明され、個人のもつ能力が除外されている。③構造の二重性⁷⁾に注目していない、という3点をあげる。システム理論も構造化理論とは違って人間個人を無視し、目標も理由もなんら必要としないものとして排斥する。

その一方で、ギデنز (Giddens, 1979) は哲学や倫理学のなかでは長い伝統をもち、学問的には歴史学研究や古典・新古典経済学、政治の理論・実践の伝統、司法、心理学などに用いられてきた個人主義の考え方を擁護する。彼によると、①社会的営力は、特定の状況のなかで行われる意図的・非意図的な行為結果の集合であり、②構造理論とは異なっ

て、主体的行為者 (Akteure) の意識が常に考慮されるべきであるという。

3) 社会哲学の文脈

全体主義と個人主義の社会哲学的な特徴は第2表にまとめられるが、全体主義と個人主義は、第3表に示すように、存在論と方法論との組み合わせによって4つに分類される。

第2表 全体主義と個人主義の基本的考え方

a) 全体主義	b) 個人主義
1. 全体主義の命題 社会は全体であり、その部分以上のもの	個人主義の命題 個人だけが目的や関心をもちうる
2. 集合主義の命題 「社会」は個人の目標のうえに作用を及ぼす	合理性原理の命題 個人はその目標との調和において与えられた条件の下で行為を行う
3. 制度的分析の命題 社会的組織は個人の行動に影響を与え制限する	制度的改革の命題 社会的組織は個人的行為の成果であり、個人的行為でもって変化しうる

出所：Werlen (1999), S.38. Übersicht 1

これによると、存在論的全体主義に属するのはデュルケーム (Durkheim, E.) やマリノウスキ (Malinowski, B. K.) である。実証分析の構造機能主義者やブラウ (Blau, 1977) の立場は方法論的全体主義に属し、

心理学的個人主義や行動主義は存在論的個人主義に当たる。このうちでは、方法論的個人主義の発想が「日常的地域化の社会地理学」にとって必要な社会概念の発展の基礎となる。ただし、ギデنزは方法論的個人主義に含まれるのに対して、ヴァーレンはそれを改良しているので、完全に同一の立場に立つわけではない。

4) 方法論的個人主義の改良版

この見方によると、社会現象——なかでも社会制度——は主体的行為者による決定や行為計画の結果である。主体的行為者となりうるのはあくまでも個人であるが、社会集団や社会制度の存在を否定するわけではないし、社会は個人の合計に過ぎないという個人主義の主張には同調しない。さらに、社会は個々の主体的行為者の精神 (Psyche) に還元しようとする命題も、十分には支持しない。というのは、方法論的主体主義 (methodologische Subjektivismus)⁸⁾ は個人以外の行為や社会全体を対象とすることを否定するからである (Jarvie, 1974)。方法論的主体主義の観点からすれば、集団の行為はその集団内の人々の行動の考察によって理解される。これに対して、方法論的個人主義の

第3表 全体主義と個人主義の第2の差異

	全体主義	個人主義
存在論的	(a)	(b)
方法論的	(c)	(d)

出所：Werlen (1999), S.42, Übersicht 3

改良版においては、集団の存在は否定しないが、特定の状況下において目標を設定し行為するのは常に主体的行為者であるとみる⁹⁾。

こうした公準のもとで、人間は自己の歴史をつくると同様に自己の地理をつくるが、人間は自分で選んだ状況下においてだけでなく、以前から存在したり与えられたり受け継いだりしてきた状況下においてそれを行うのだ、というマルクスの説明にもヴァーレンは同意する。しかしこうした公準によって決定を下すのは国家ではなく、多数の人々によって先に権限を付与された主体的行為者であるとみる。すなわち、社会制度をつくっていくのは集団によるのではなく、個人の意図やそれに基づく結果によるとヴァーレンは考えている。

主体的行為者の行為においては、純粋に主体のもつ前提条件のほかに社会的側面や自然的条件も注目される。つまり、行為者とその行為を社会的には真空状態にしてしまうのではなく、主体的行為者が行為の際に利用する知識の大部分は常に「社会化された知識」であるとみるのである。とくに主体的行為者の意向や機関（組織）・集団の考え方は、その行為に強く反映される。メルシ（Melucci, 1989）やウリー（Urry, 1985）は、「集団的アイデンティティ」の形成には、社会的な運動がその成果にとってきわめて重要であるという。

繰り返し述べるように、主体的行為者の行為は、集団や社会状況によって完全に決定されるわけではない。「集団の行為」は、この意味では共通意見をもつ人の協力的行為によるものと考えられる。現実にはたしかに、集団や組織が決定を下す場合が多いが、それは集団がその代表者に集団の名において行為する権利を譲渡したもの——ブルデュー（Bourdieu, 1985）のいう超実体化過程（Transsubstantiationsprozess）——である。その点では、誰が主体の名において行う行為の権利をいかにしてえたかを分析するのが重要となる。組織上の地位も主体者の行為の結果えられたものであり、社会関係の存在は争えないが、それは行為によって生じた結果であるとみる。その説明の中には行為に対する制度の影響も含まれており、強制を迫る制度の影響を全く無視するわけではない。それゆえ、行為とその結果が真っ先に研究されるべき問題であり、独自の作用力をもたない「構造」とか「集団」は第2義的な研究対象といえる。

最後にヴァーレンは、方法論的個人主義の改良版とギデンズらの主張する従来の方法論的個人主義との異同点を次のように整理している。①個人だけが行為するという点では、ギデンズにも賛同できる。②しかし、方法論的個人主義の改良版においては、個人は主体的行為者というだけでなく、社会組織や集団を代表するかたちでも存在する。③さらにヴァーレンにおいては、社会現象に関する発言は個人の心理的・生理的特徴に基づくものよりも特定の社会的・自然的条件のなかで生ずるので、主体的行為者の行為には少なくとも社会文化的、主体的、自然的成分が含まれており、その行為は常に社会関係によって強い影響

を受ける。したがって、ヴァーレンはギデنزよりも社会的関係を重視することになる。
④ヴァーレンの場合には、社会は意図的・非意図的な行為の結果からなる。その際に、行為の法則性は発見しうるのは、ある特定の社会的・自然的条件のもとにおいてである。主体的行為者の大部分が社会制度の枠内で行為をなし、その意識や知識がその社会によって特徴づけられている場合である。

5) 分析的マルクス主義

かくして方法論的個人主義の改良版は、一見、分析的マルクス主義におけるエルスター (Elster, 1988) の見解と一致するようにみえる。しかし、上述のエルスターの解釈は、存在論的全体主義やそれと結合した決定論的な歴史把握の傾向に反対しただけで、結局はマルクス主義理論の経済主義を強化したものであった。さらに、行為の合理性という点からみると、主体は経験的意味において常に合理的に行為するわけではなく、ただ形式的な意味においてだけ——主体のもつ一般的知識の論理的適合性や行為目的に関してだけ——その状況の特殊性を考慮していることが注目される。マルクス主義では、個々の主体は共通目標達成のために行為したり共通の名前でもって任務を遂行するのではなく、その組織自体が行為能力をもつものとする。この考えが現実に妥当するならば、集団はそれ自体のために行為することになり、主体的行為者は行為能力をもたないことになる。

6) 行為理論的社会概念

このような行為理論的社会概念においては、社会や社会関係はもはや個人の集合以上のものではなく、行為の集合やその結果として考えられ、それはまた行為の条件ともなる。それは、社会や社会構造自体が行為するというマルクスやデュルケーム、アルテュセール (Althusser, L.) の主張とは逆に、主体的行為者だけが行為するとみるのである。主体的行為者は、社会状況に対して独自の解釈能力をもっており、デュルケームがいうように「構造の表現」であったり、アルテュセールがいうように「構造に規定された機能担当者」であったりするわけではない。たしかに、行為者のもつ身体的重要性を無視することはできないが、社会科学の研究対象はあくまでも行為者が行う行為そのものであって、主体的行為者自体ではない。個人をとりあげることは、身体中心的な部分を過度に強調することになる。行為は特定の形態において身体を前提とするけれども、その行為の意味内容や目標、過程、結果は身体とは関係ないし、また個人の自意識だけに関係したものでもない。

その意味においては、社会を構成する「原子」は個人ではなく、あくまでも行為そのものである。行為には個人的・主体的成分だけでなく、もちろん社会文化的成分や自然的物的成分も含まれている。方法論的個人主義によると、一方的な解釈は歪みをもたらし還元主義に陥る危険性があるので、行為分析や社会分析は単に肉体的・主体的・社会的な側面

に限定されない。伝統的個人主義では、個人だけが主体的行為者であるが、方法論的個人主義においては、社会現象は行為でもって最も適なかたちで研究しようとする。さらに方法論的個人主義の改良版のもとでは、行為の主体的内容と制度的・構造的側面との間の二重性に強く注目するとともに、社会的現実に対するこのアプローチの方法論的・非存在論的な性格を強調することになる。この研究レベルにおいては制度的・構造的 content と主体的 content との二重性だけでなく、構造分析と行為分析の補完性も考慮される。

7) 「日常的地域化の社会地理学」に対する帰結

上述したように、主体の意識は、たとえ不完全であるとしても、社会文化的状況の表現である。社会文化的世界においては、社会規範や文化的価値のほかに経済的・法的・宗教的など制度的なものが考察の対象となる。社会文化的世界は非物質的なものによって構成され、主体の精神的世界を超越して存在するので、主体の集団として通用する象徴的存在様式とみられる特別な地位が与えられる。

ギデنزの説明との関連においていえば、この方法論的主体主義の概念は「構造の二重性」ともうまく整合する。ギデنز (Giddens, 1979) においては、制度は行為の成果とみられるだけでなく、社会再生産の手段ともなる。ギデنزは、構造理論は行為者の能力やその行為理由を問題にすることなく、客観的構造にだけ関心をもち、行為と構造の関係について次のように考えている。①社会システムは行為主体の業務行為のなかでつくられるので、行為レベルの分析が必要である。構造的要素が必然的に行為の特徴に含まれるとしても、制度分析に拘束がある限り、社会システムはある決められた方法論に従うことになる。②制度分析は行為に関する検討を制限し、再生産の手段という意味において社会システムの様相を集中的に検討する。これは純粹に方法論的束縛といえる。しかも、ギデنز は構造化過程の研究のためにある方法を利用しなくてはならないといいながらも、特定の説明方法に結びつけてその方法を詳細には説明しなかった。

第2章 伝統的社会と近代末期社会

伝統的社会においては、主体的自己決定に関する鋭敏な感覚があまり発達していなかった。したがって、伝統的地理学や空間科学的地理学においては、空間研究が基本をなしてきた。そこでは、社会や文化は空間的現象ではないと考えられているが¹⁰⁾、このような地理学的観点が長く維持されてきたのは、空間的にも時間的にも強く固定された当時の生活形態にあった。伝統的地理学がとくに農村や農業分野に大きな関心を示したことについては、それなりに理由があった。近代末期社会について検討する前に、構造化理論の考え方について説明する。

1) 構造化理論の基本的な考え方

ギデンズの構造化理論では、社会は能力ある行為者によって構成され、それが社会構造に影響すると考える構造化の発想が基本にある。ギデンズにおいては、社会科学は行為や構造、社会システム、社会的生産・再生産に関する調査において、いかによく現実に対応しうるかが問題となる。その場合に、社会や社会生活は行為や制度化された実践の概念を用いて分析されるべきであり、構造的カテゴリーによるものではないというのが基本的考え方である。関心の中心は構造ではなく構造化、つまり「構造がつくられるプロセス」にある。構造と行為とは同一物の異なった側面であり、構造と行為の関係は弁証法的関係にあるとみる。

しかしながら、ギデンズは行為について有効な定義を考えてはいないとヴァーレンは考える。彼のいう行為の中心には、伝統的行為理論にみられるように、意識や意図は含まれていない。彼は、すべての主体には物事にうまく対処しうる意識があると考え、それによると、行為は1つのまとまりのある活動結果ではなく、むしろ活動の流れであり、限定したり固定したりすることはできず、意識や意図は行為の中心の特徴とはならない。

ギデンズによると集団や組織は構造をなしているが、構造には主体はなく、主体は行為において構造と関係する。彼は構造を規則と資源とに区分する(第4表)。資源は人間行為の中にある能力で、分析的には授権的資源(autoritative Ressourcen)と配分的資源(allokative Ressourcen)とに区分される。前者は人々や主体的行為者をコントロールし変形していく能力(いわば政治的能力)である。すべての社会でみられる最も重要な授権的資源は、社会の時空間的組織や人間の生産・再生産、人々の生活機会の組織に関係する。他方、配分的資源はものや物的現象をコントロールし変形していく能力(いわば経済的能力)である。その最も重要なものは、原料・燃料や生産手段、生産物であり、マルクスのいう生産関係に該当する。

第4表 規則と資源

規 則	資 源
解釈シェーマ (意味論的規則)	配分的資源
規 範 (制裁規則)	授権的資源

出所: Werlen (1999), S.83, Übersicht 4

2) 種々の社会形態の区分

近代と前近代とを区分するのは啓蒙期である。近代は本質的には工業社会であり、現代は近代末期社会といえる。近代末期というのはリオダール(Lyodard, 1986)やデリダ(Derrida, 1976)、フクヤマ(Fukuyama, 1992)¹¹⁾らが主張するポストモダン¹²⁾とは別の概念である。現代を近代末期に位置づける利点は、将来を固定的にみることに反対し、人間の歴史の将来を未定のものとみなすことにある。社会科学でいうポストモダン社会では、

中心もなく統一もない社会形態であり、主体はもはや認識の中心からはずれてくる。それは、①これまでに知られた知識が有効かどうかも不確実な社会である。②そこでは、歴史はなんら目標を示さないの、前進という概念が成り立たない。③社会生活においては新たな問題が現れ、環境問題や新たな政治活動の中心がますます重要な意義をもち、現実に対して多様な解釈が成り立つ社会である。

ギデنزもヴァーレンも、現代をこうしたポストモダン社会とは認めない。ポストモダン運動では近代的制度の変形によって新たな社会秩序が構築されると考えているが、われわれはポストモダン時代に生活しているのではなく、モダンの結果が過激化し普遍化した時代のなかで生活しているとヴァーレンは理解している。

そのようにみると、今日の社会を説明する理論が必要となり、前近代と近代末期社会の存在論が考えられる。ギデنز (1993) が両者の差異として注目するのは、①社会変化の速度、②社会変化の範囲、③近代社会のもつ再帰性 (Reflexivität)¹³⁾ である。これらは、第5表に示すように、近代末期における①時空間を超えた社会システムの広がり (時間と空間の分離)¹⁴⁾、②社会的諸制度の脱定着化、③近代的諸制度の再帰性、に対応する。これらの次元はまた、①社会とテリトリーとの関係、②そのテリトリー内にある自然的資源に対する特権とその特権の時空間的保全、③制度的な実践によって時空間的に構造づけられたパターン、④ある特定の地域社会への帰属意識、と関係する。

第5表 前近代と近代末期の間のカテゴリーの差異

社会変化の速度	時間と空間の統一と分離
社会変化の範囲	定着化メカニズムと脱定着化メカニズム
制度の作用形態	伝統の力と制度的再規性

出所：Werlen (1999), S.88, Übersicht 5

ギデنزには近代社会の特性を伝統的社会と対比することによって説明する¹⁵⁾。とはいえ、現実社会においても伝統的社会と近代社会とは相互に結合するかたちで存在しており、社会変化はどこでも同じ形態をもって段階的に発展しているわけではない。むしろ狩猟収集、氏族社会、国民国家など種々な社会形態が共存している。こうした考察方法は、ヨーロッパ中心の世界観から解放することになる。

その際にギデنز (Giddens, 1981) は、マルクス主義を含めた進化理論は行為者の能力を過小評価しているとみる。社会生活の存在形式の変化についていえることは、時空間的距離を超えた行為の高度な発展やその作用範囲の拡大にある。とくに重要なことは、時代によって配分的資源や授権的資源の能力に大きな差異が生じたことである。さらに、近

代末期社会の社会存在論では、高度な再帰性を特徴とすることが認められる。

3) 伝統的社会

伝統的社会は、これまで社会的再生産手段が固定し硬直化した社会とみられてきた。ヴェーバー (Weber, M.) は、「伝統的社会では古くからの伝統に依存するのに対して、今日の資本主義企業の行為は最高の合理性段階に到達した」と考えるが、ギデنز (Giddens, 1981) は当時においても今日のように有能な主体的行為者がいたとみる。原始社会では時間という抽象概念が欠如し時間的意識は乏しかったが、革新や変化はゆっくりと進行していた。狩猟収集社会や定住した農業社会においてある時空間的距離を超えた社会関係が成り立つのは、伝統に基づく権限と姻戚関係による組織形態のためである。そうした社会関係を維持する上で重要なのは、その場に参加することであった。社会的知識は文書によって貯蔵できるが、文書を欠く社会では記憶補助手段の利用ができず、コミュニケーションは著しく限定されていた。

(1) **社会変化の速度** ローマ帝国や封建時代のような伝統的文化の時代においては、社会変化は100年リズムでもって進行し、出所 (身分) や年齢、性によって各人の地位が決定され、個人的決定やその行為によって変化することはなかった。伝統的社会では、空間的側面と時間的様相とが密接に結合し、行為は定着していた。時間と空間の統一を示す第1の理由は、時間に関する予備知識が活動の場所からえられることにある。これは正確には、時間に対する空間の支配を意味する。第2の理由には、前近代における日常世界の空間概念の特徴として、社会的内容をもつ空間の具象化 (Reifikation) があげられる。伝統的社会では、表現される客体と表現する主体 (Bezeichneten und Bezeichnenden) との明瞭な差異が認められず、ある場所のもつシンボルの意義は魔力と祈禱によって認められた。このようなシンボルの意義の具象化や実在としての空間が、空間の計測を必要としなかった。

(2) **社会変化の範囲** 伝統的社会では、コミュニケーションや輸送技術の未発達のために、文化社会的な表現は主にローカルないしリージョナルな範囲に制限されていた。定住農業社会では、その範囲は長い間徒歩の範囲に限られていて、時間と空間の分離の程度も小さかった。狩猟収集社会では、彼らはその行動領域を支配し管理することはできたが、経済的交換に関する行為には交換相手の身体的参加が前提をなしていた。

定住的な農耕社会になると、食糧の貯蔵能力の発生によって人間活動は空間的にも時間的にも拡大した。物資の貯蔵は時間を超えた供給を可能にし、物資輸送の前提となった。ギデنزは、農業——とくに灌漑農業——が時間と空間の著しく分離した社会の存在を可能にする前提とみる。それに次ぐ貯蔵能力は授権的資源であり、この貯蔵は情報や知識の

保持や制御を意味した (Giddens, 1981)。名簿の使用や文書がこれに対して重要な役割を果たし、定住農業社会では人間活動の調整や制御の制度的拡大をはじめて可能にし、監視 (Überwachung) の出発点ともなった。今日コンピュータの登場でもって記憶力は増大したが、それによる権力の拡大は資本主義初期には遠く及ばない状態である。

(3) 制度の作用 上述したように、伝統的社会では人々は伝統の強力な支配のもとで生活しており、個人による意志決定は少なく、制裁には主にグループ制裁が採用された。資本主義以外の社会では授権的資源の相互調整が社会変化にとって重要であったと考える。これに対して、ギデنز (Giddens, 1981) は、物資や生産施設の制約を重視するマルクスとは異なって、資本主義社会を特徴づけるのは時間と空間の分離による制約であるとみる。

(4) 要約 伝統的社会では個々の行為者の活動範囲は空間的に制限され、しかも長期にわたって安定しており、宗教が大きな役割をもっていた。文書 (書きもの) の導入以前においては遠く離れた人とコミュニケーションする方法はほとんど存在しなかったのに対して、文書による情報の蓄積が社会生活をコントロールする前提となった。伝統的社会では、配分的資源による変革ポテンシャルも他の社会形態に比べて相対的に小さかった (第6表)。

第6表 伝統的社会の特徴

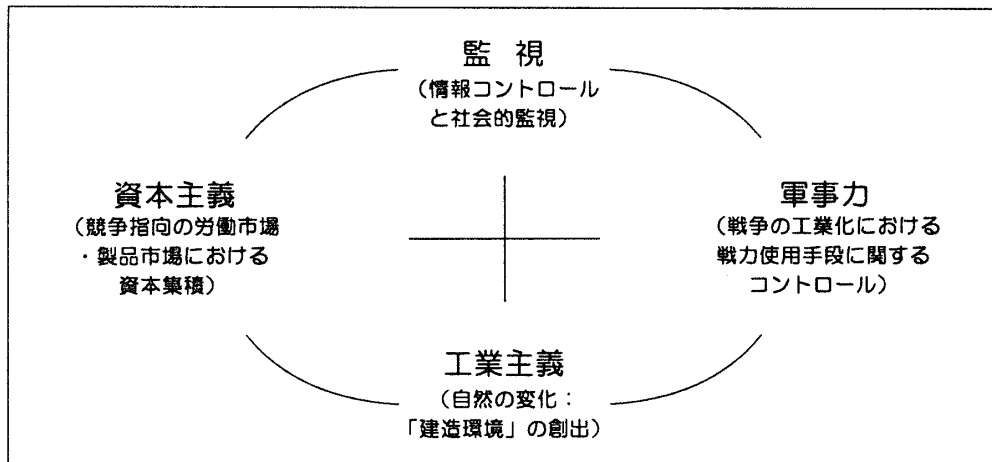
-
- | |
|-----------------------------------|
| ① ローカル社会は信頼ある生活状況をつくる |
| ② コミュニケーションは主に対面接触による |
| ③ 伝統が過去と未来を結びつける |
| ④ 近親関係が時間的・空間的にみて社会結合の安定化の組織原理をなす |
| ⑤ 社会的地位の割り当ては主に出身、年齢、性による |
| ⑥ 地域間のコミュニケーション機会は少ない |
-

出所：Werlen (1999), S.102, Übersicht 6

4) 近代末期社会

近代社会の発生に対して、マルクスは資本主義、デュルケームは工業主義と分業の発達、ヴェーバーは近代性＝合理化をそれぞれ強調するが、ギデنزはいずれの3指標のすべてがともに重視されるべきであると考え。しかも、彼はヴェーバーよりも官僚主義の重要性を強調し、より一般化した形態として監視という術語を用いる。さらに第4番目の指標として、国民国家の権力行使の手段として軍事力——すなわち「戦争の工業化」——を重視する。したがってギデنزはいずれの4つの側面からなる近代末期社会の制度はこの4つの側面からなる (第1図)。

さらに、マルクス、デュルケーム、ヴェーバーらの古典的社会理論に対する第2の批判として、ギデنزはいずれの国民国家的な社会組織の重要性を指摘する。近代においては国民国家



第1図 近代の制度的次元

出所：Werlen (1999), S.104, Übersicht 7

の成立が重要なものと考え、その特徴として、①確定された国境内での領域の結合、②時空間を超えた社会システムの著しい広がり、③社会制度の時空間的な存在、の3点をあげる。国家主義は19世紀に現れた新しい現象であり、脱定着化に適合したものとする。

第3の批判点は、社会科学と近代末期社会との関係にある。学問も日常世界も変化するなかで両者は強く結びつき、日常世界では再帰性が強化されてきた。近代社会の大きな変化は、ギデンズによれば、①時空間を超えた社会システムの広がりとその多様な結合、②社会システムの脱定着化、③社会関係の再帰性を伴った秩序形態、にあるとする。

(1) **社会変化の速度** 前近代に比べて近代社会の社会変化のスピードが著しく速く、時間と空間が分離する。前近代においても時間と場所とは全く無関係ではなかったが、近代末期においては、時間はもはやある場所に固定されず、空間的なものによって決められないため、人々の活動内容を規定することはできない。大きな距離を超えた活動を調整するのは抽象的な時間規制だけである。時間と空間の結合には、もはや伝統や宗教による規定はない。不在の人々による行為との時間的結合も、特定の場所との固定した関係なしに行われる。時空間的次元は行為の形式的な側面となり、その活動内容とは結びつかないものとなる。

資本主義的労働の特徴は、原則として時間と空間の商品化に結びつけられていることにある。労働契約は時間の商品化に直接結びつくのに対して、空間の商品化はその居住形態にとって最重要な前提となる。これは、ハーヴェイ (Harvey, D.) やルフェーブル (Lefebvre, H.) のいう建造空間 (gebauter Raum) に当たる。そのなかでは近代社会住民の大部分が日常生活を営んでおり、資本主義的な合理性が彼らの生活の中心をなしている。重要なことは、①社会活動が局地的条件から切り離され、②時間と空間の分離やそれ

ぞれ個別の標準化が、大きな時空間的隔りを超えて社会関係の再構築を可能にし、③それが合理的組織の発生と普及の基礎となる、ということである。労働や時間・空間の商品化に基づく合理的組織や各目的のための分離や再結合は、近代末期社会の特徴とみられる。この合理的な組織形態が、ローカルな行為とグローバルな行為との結合を可能にしている。

(2) **社会変化の範囲** 社会が時間と空間の分離した脱定着化の時代を迎え、社会関係はローカルな地理的条件から独立したものとなった。「社会の脱定着化」の発想は、社会の地域分化を主張する機能主義や進化論に基づく構想を拒絶することになるので、ギデنز は脱定着化というメタファー（隠喩）を社会変化に最も適した表現と考えた。脱定着化の第1の条件は、時間と空間の分離にある。それは間接的コミュニケーション能力の時空間的な拡大を意味し、不在の主体的行為者とのコミュニケーションを可能にする。それは、共存在（社会的出来事への参加）によるコミュニケーションだけでなく、情報主体の不在によるコミュニケーションの複雑な関係に注目することである。

このように、コミュニケーション機会を維持したままでの時空間的距離の拡大が、近代末期における日常生活のグローバル化（世界的社会関係の強化）にとって最重要な前提といえよう。それはまた、グローバル化の進展がローカルな結合を強化し、地域主義や国家主義の傾向を強めるという逆説的な結果ともなる¹⁶⁾。こうした時空間的距離の拡大やグローバル化を許したのは、文書、印刷技術、電子コミュニケーションと象徴的通標（symbolisches Zeichen）や専門家システム（Expertensystem）¹⁷⁾ を利用する近代社会にあることはいうまでもない（Giddens, 1995）。

上述のように、文書は時間と空間の相互作用能力を拡大させ、不在者とコミュニケーションさせる最初の条件となった。印刷情報は大きな社会組織（国・帝国）の発生にとって重要な条件である。電信から電話、ラジオ、テレビを経てファックス、電子メールに至る電子コミュニケーション技術の発達にはコミュニケーションの伝達速度を高め、情報や知識のグローバル化を可能にした。

ここで、象徴的通標とは交換メディアであり（Giddens, 1995, S.34）、その代表は金銭と文書である。専門家システムは技術的能力や専門知識のシステムであり、われわれの生活する自然的・社会的な周辺地域に広く存在する。人が住む住宅建築、自動車や飛行機、疾病保険・生命保険などはすべて専門家システムである。これらは専門的な知識によってつくられたもので、その使用者とその生産者との間には匿名の関係が成り立ち、時空間的脱定着化の発展を助ける。ただしその一方では、脱定着化メカニズムの発達によってグローバルレベルでもローカルレベルでも、専門家システムは新たな危険の発生源となっている。

(3) **制度の作用** 近代末期に急速に広がった第3の次元は「近代の再帰性」である。近代社会では、主体は初めから決められた行為パターンをとることは少なく、彼らの行為様式には個人的決定やその必要性が多く含まれている (Giddens, 1991)。著書『近代性と自己アイデンティティ』のなかでギデنزは、近代制度の再帰性は行為に関する知識——つまり行為の再帰性——と密接に結びついていることを指摘した。近代において行為を禁止したり抑制できるのは知識だけであり、近代の再帰性にとって社会科学の知識は不可欠なものといえる。

(4) **要約** 近代末期社会における行為は、もはや伝統に従って決定されるものではない。個人の社会関係は身分によってではなく、経済活動や職業活動のなかで決定され、社会的地位は生産過程における地位によって決定される。行為が固定的・伝統的な束縛から解放されることは、社会的コミュニケーションにおける行為者の時空間的距離を拡大する。近代および近代末期の制度的な脱定着化過程を推進するメディアには、上述の象徴的通標と専門家システムとがある。両者は情報収集や情報普及を可能にし、それは不在の相手との相互作用を可能にし、離れた物財に対する利用権を生じさせる。そこでは、ローカルとグローバルな条件は相互に密接な関係をもつ (第7表)。

第7表 近代末期社会の特徴

-
- ① 世界村が主に匿名の経験をさせる
 - ② 抽象システム (金銭, 専門家システム) が大きな時空間的距離を超えた社会関係を可能にする
 - ③ 日常ルーチンが存在を確信させる
 - ④ グローバルに現れる世代文化
 - ⑤ 社会的地位の割り当ては主に生産過程のなかで生ずる
 - ⑥ 世界的な情報システム
-

出所: Werlen (1999), S.127, Übersicht 8

5) 「日常的地域化の社会地理学」に対する帰結

上述したように、社会存在論に関する論議は前近代と近代末期の間で著しく異なる。伝統的社会では、時空間的な定着性のなかで、多くの場合、社会関係を全体的に考察することが可能であった。たとえば、各世代の人々にみられる行為様式の差異は少なかった。伝統的社会ではまた、表現される客体と表現する主体の間の明瞭な区別がなく、場所に対するシンボリックな規範的要求はその場所のもつ特性によるものとみなされ、シンボリックの確定に関する社会過程の特徴としてではなかった。

身体が自己アイデンティティの形成にとって中心的役割を果たすように、シンボリックの特徴を付与され具象化された空間 (場所) は、社会的な自己理解にとって重要な意味をもつ。

その限りにおいて、テリトリーや場所は「社会的なもの」といえる。伝統的地理学においては、この具象化されたものが研究対象の基礎をなしていた。こうした日常的構築物の無批判な導入が、地理学を景観論、地誌学、空間科学といわせることとなった。したがって前近代社会においては、社会概念と空間概念とは密接に関連していた。空間関係は、行為者にとっても全体的な社会的自己理解においても、本質的に重要なものであった。

これに対して、近代社会では主体に対して認識論哲学の重要な役割が割り当てられ、主体が現実を形成する重要行為の中心をなすものと考えられる。実体主義 (Substantialismus) は名目主義にとって代われ、それぞれの事実の意義はその実体とは関係なく、意見の一致や慣習や名目的な決定の表現となる。この劇的变化によって、定着化メカニズムは脱定着化メカニズムへと移行する。そこでは、時空間的に縛られた伝統的な行為に代わって、合理的思考による日常的ルーチンが現れ、それが個人の決定を常に新しいものとした。

近代末期社会の脱定着化は、「世界の魔力喪失 (Entzauberung der Welt)」とともに象徴的通標や専門家システムを通して行われた。それは、大部分の行為者にとってはグローバル化の進行のなかで、間接的相互作用が支配的なコミュニケーションへと変化することを意味する。その場合には、一般住民の生活スタイルはどこでも類似したものとなったが、生活様式の均一化とみるのは尚早である。それは、ヴィダル (Vidal de la Blache, P.) のように、地域的生活様式によるものではなく、むしろ人々の社会的地位と関係したものである。主体の行為は、社会的・経済的・文化的な地位の表現であり、社会の再生産や変化の手段である。

今日の社会存在論に適合した社会地理学の研究は、主体の行為を中心とすべきである。そこでは、空間は行為規則を提供することなく、時間と空間はもはや「隠された社会規則」としての役割を果たさない。そうした社会存在論的条件のもとでは、地理的空間の研究はそれほど重要ではなく、主体の行為にとっての空間的条件を研究することの方がより重要となる。空間研究は社会文化地理学研究の目的ではない。

第3章 前近代的空間

しかしながら現実の社会問題には、種々のかたちで空間的成分が含まれる。これまで、社会的事実や社会関係の存在論が中心をなしてきたが、社会・空間関係のもう1つの側面である空間の存在論的状况が問題となる。

全体的社会においては、主体的行為者の活動を決定づけるのは構造物や集合物であり、空間が個々人の身体に決定的な影響を与えるものである。啓蒙時代になると、物質に対して精神が決定的な優位性を獲得し (Habermas, 1988)、それとともに、名目主義が実体主

義に対して優位をえた。それは最終的には、大きな時空間的距離を超えて社会コミュニケーションや社会的相互作用の実現を可能にしたので、ギデنزはそれを時空間的脱定着化 (raum-zeitliche Entankerung) と呼んだ。

上述のように、前近代の生活は空間的に狭い地域に限定され、住民の生活様式と自然条件の間には密接な関係が存在したので、伝統的地理学では空間自身が活動条件であり、地理的決定論はある程度納得のゆく説明をなすことができた。空間科学的地理学においても少し変形してはいるが、類似の発想が存在した。

地理学において、空間の理解をめぐる論争は今日まで繰り返されてきたが、地理学における社会と空間との関係は伝統的な農業社会を中心に論じられたところに問題があった。結論的にいえることは、伝統的地理学における空間理解やそれと関連した社会把握は、今日では十分に力をもたないことである。哲学論争の中で問題となるのは、空間自身が実態として1つの構造をもち、因果的に作用するのか、それとも空間概念は物的対象物に過ぎないのかという問題である。

1) 社会科学における空間問題の重要性

物理学や幾何学、地理学などの学問は、空間に対して特別強い関心をもつ学問である。しかし、これらの学問の空間的論議は自然的世界に集中しており、人間行為をその考察に含めることはなかった。社会理解にとって空間の存在論的状態の問題に関する解答が必要であると考えた哲学や社会学の文献には、これまで注目されなかった。従来、空間概念と社会概念とは自然科学と精神・社会科学間との結合の不備のもとで、それぞれ独立に論じられてきた。

社会の地域形成 (Regionalisierung) に関する研究に初めて注目したのはギデنزであった (Giddens, 1979)¹⁸⁾。しかし、彼の構造化理論は「パンドラの箱 (開くと災いをもたらす箱)」を開けただけで、体系的説明とはいえないという批判もある。ギデنزのこのテーマに関する説明があまり体系的でなかったことも事実であるが、ヴァーレンはそのような批判的見方には賛成しない。ただし、ギデنزの発想に重要な問題がないわけではない。それは、ギデنزには空間に実体論的特性を含める傾向があり、社会過程にとって本質的容器をなすものとみることである。ギデنزは、時間地理学をとり入れるために、ハイデッガーやカント、さらにはライプニッツの空間概念に依拠することなく、ニュートンの絶対空間ないしは実体空間の上に構造化理論を構築している。

社会学の理論形成における空間の無視——空間的側面に関する無関心——とは逆に、地理学では、少なくともラッツェル (Ratzel, F.) やヘットナー以来一貫して空間に関係した科学部門と規定することに努力してきた。地理学では空間論議をその基本問題と考え、

社会地理学では地理学としての立場から社会関係の空間的成分を明らかにすることを目標としてきた。しかし、社会分野の未分化な概念のもとで、社会地理学者は空間的カテゴリーの意味を十分には認識しなかった。これに対して哲学においては、空間問題の論議が重要視され、それぞれ異なった歴史的条件のなかで空間に関する種々の論議がなされてきた。まず主要な空間概念とその変遷について紹介しよう¹⁹⁾。

2) 絶対空間・実体空間の概念

この概念の出発点はアリストテレスの『物理学講義』に求められる。絶対空間では、「空間はその中に分布する物質とは独立に存在するので、空間的な対象物が全く存在しないときでも空間は存在する (Buroker, 1981)」といわれる。したがって実体論者は、対象とする空間の構造をその物的対象物とは独立に存在し、独自の形態をもつものとする。このような絶対空間は容器としての空間であり、アリーナとも呼ばれる。

この空間概念は今日においてもよく使用されており、英語圏地理学の論議においてはこの概念の多様な組み合わせや解釈がみられる。それは、部分的にはギデンズの構造化理論にも影響を与えている。すなわち、ヘーエルシュトランド (Hägerstrand, T.) の時間地理学はニュートン法則の上に構築されたが、その後の説明や解釈ではグレゴリー (Gregory, 1989) やバティマー (Buttimer, 1976, 1984) によってハイデッガーの思想 (『存在と時間』, 1986年) に結びつけられている。

一方、ドイツ語圏の地理学においては、ラッツェルの『人類地理学』からヘットナーの地誌学やラントシャフト地理学を経て初期の社会地理学に至るまで、主に実体空間が論じられてきた。たとえば、オトレンバ (Otremba, 1961, S.134) は人間の自然的・精神的作用の他に空間自体のもつ本質的作用を認め、それが人間活動を決定的に作用すると考えた。オトレンバの弟子バーテルス (Bartels, 1970) は——もう1人の弟子ヴィルト (Wirth, 1979) とは違って——空間のもつ作用力には賛成しなかったが、距離が地表上の秩序構造の形成にとって決定的な意味をもつと考えた。

(1) アリストテレス 上述のように、絶対空間・実体空間の概念を初めて論じたのはアリストテレスであったが、この概念を完成させたのはニュートンであった。アリストテレスは空間のもつ方向にはそれ自体に作用力があると考えた。位置や方向が立地する個体や運動個体の性質を決定し、個体が新たな位置を占めるやいなや、その位置変化によってその性質も変化する。しかし、空間自体が1つのものであるとすれば、それはどこかに存在しなくてはならない。とすると、空間はどこに1つの場所を占めるのか、いかなる規模をもつのが問題となる。この空間理解にとって最も重要なのは、均質空間の存在よりもむしろ何がどこにあるかについて考えることである。なお、彼はもっぱら自然的世界空

間について論じ、それは火と空気、水、土地の4要素からなるとした。

(2) **デカルト** 彼は『哲学原理』(1644年)のなかで空間概念について詳しく検討し、実体空間の概念を支持した。しかし、広がりという実体のない空間を考えることはできないから、空の空間 (leerer Raum) は存在しないというのが彼の第1結論であった。彼は広がりをもつものを個体 (Körper) とか物質と呼び、個体の広がりとは空間の広がりとは同一範囲であり、空間も物的実体でなくてはならないと考える。その場合に、距離は物的個体間の広がりを目指す。したがって、空間は物的個体の集合以上のものであるとするアリストテレスらの実体主義者の考え方とは対立する。さらに、意識内容は自然界の空間の中には存在しないというのが第2結論であった。アイディアや思想、意識内容は長さや幅、深さの広がりを示さないし、物的個体ではないので、自然界の空間には含まれないとする。物的個体の広がりをもって空間の広がりとする第1結論には異論があるが²⁰⁾、第2結論には支持者が多い²¹⁾。

(3) **ニュートン** 最近、ニュートンの空間概念はヘーエルシュトランツやカールシュタイン (Carlstein, T.) の時間地理学に導入された後、最終的にはギデンズによって構造化理論に統合され、社会・空間関係のテーマや解釈において重要な役割を果たした。ニュートンの『数学原理』(1687年)の冒頭では、「絶対空間は外部物体とは関係なく、その本質において常に同じであり、不動のものである。相対空間 (relativer Raum) は絶対空間の動態的部分であり、他の個体に対するその空間の位置によって示され、通常は不動の空間として受けとられる。たとえば、地表空間の一部のように、地球に対する位置によって決定される。絶対空間と相対空間とは種類や大きさでは同じであるが、数量的に常に数えられるものではない」と述べている。ニュートンによると、空間は均質で画一的である。それゆえに、それを位置づけるためには目にみえる座標システム——つまり相対空間——を設定しなければならない。相対空間は絶対空間のなかで——相対的位置を変えることによって——動くことになるので、真の空間というのは絶対空間である。

この絶対空間・実体空間の概念は物理学や神学にとって重要であった。それは、物理学では第1運動法則の有効性を証明する前提条件として重要であるが、神学においては神の姿を見いだすために必要であった²²⁾。ニュートンは空間と時間を神の属性とし、神が(絶対)空間をつくると考える。彼の生きた時代には、その社会を支配する絶対的な考察様式がなお存在していたのである。絶対空間・実体空間は現実的なものであるが、空間は神の属性なので、空間のなかには自然の摂理が表現されている。

3) 関係空間の概念

関係空間の考え方では空間は、ともに存在するものの秩序とみられ、その古典的代表者

がライプニッツである。彼は、空間は自然的対象物とは無関係に存在しうるかどうか疑問を抱きながらも、空間は現実存在するという実体論者の主張には反対する。彼は、空間自体を特別な対象物とし、空間的作用力や空間的特性をもつものとみるのは誤りであるとする。自然界の特性は、個々の物的個体のもつ特性としては存在しないからである。

もちろんその場合に、空間性に関する発言まで否定しようというのではない。関係論者においては、空間性とは物的対象物にとっての関係である。広がりをもった対象物の間には関係がなりたつが、対象物と空間の間には関係は存在しないとみられる。ネルリッヒ(Nerlich, 1876)によると、「空間自身は存在せず、ものとその関係に関する説明だけが理解されうる」。空間は物的対象物が相互にもたねばならない実際の関係の組み合わせにすぎないので、独自の形而上学的地位をもつことはできないという(Buroker, 1981)。

(1) **結末状況と哲学的基盤** ライプニッツは、「空間が絶対的なものだとすると、その本質は永久不変でなくてはならないし、そのためには無限の神を信じなければならない。しかし、空間は時間と同様に、純粹に相対的なものである。時間が『前後に関する秩序』であるように、空間は『ともにあることの秩序』である」と考える。まずそれぞれの内容は因果的關係をもち、無限の因果律をもつ。その因果律は人間行為にも妥当する。

ライプニッツもニュートンと同様に、この世界のすべての出来事は神の意志の表現であり、因果律の一部であるとする。しかし、神は個人の自由な決定を予見しているが、人間生活は神によって初めから決定されているわけではないとする。彼の单子論(Monadenlehre)においては、神は無数の身体的・精神的実体である単子を創造する。単子は生物の非物質的な形而上学的な点である。単子は最高段階では自己意識、つまり再帰的認識を含み、そうした記憶力をもつ単子が精神だという。

ライプニッツによれば、個体は運動を起こす特性——生物力や運動エネルギーによって運動が生ずる——を備えており、空間を組織づけるものとするので、空間を単なる個体の広がりとするデカルトの結論とは一致しない。しかも、その広がり大きさは決して絶対的なものではないので、絶対空間は定められないという。

(2) **ライプニッツの関係空間の概念** ライプニッツはニュートンを批判して次のように述べている。「ニュートンは永続的な運動について十分に理解しないため、空間概念の論議が神学的な方向に向かい、空間存在論の問題が神の存在論の問題に移行してしまった。唯一存在する生物力や運動エネルギーの作用力は個体の特性によって定まるので、実体空間よりも関係空間の方がこの命題に適するものである。個体の運動は、他の個体との関係のもとでその特性が表現されるので、それを越えたものや空間の特性によって理解すべきではない」と。空間と時間は「もの」以外のものとみなされ、ものの測定に利用され

ると考える。

(3) **実体空間の概念に対する批判** ライプニッツが実体空間について批判するのは、次の2点である。①空間を考えるための十分条件は位置関係であり、絶対空間を導入する必要はない。②空間は位置や関係に集約される。真の作用力をもつのは個体の特性であり、空間の特性ではない。

(4) **批判的論議** ライプニッツが絶対空間を徹底的に否定するには、3つの理由がある。①絶対空間を受け入れそれを神の属性と考えるとき、個体的な神の姿を想定しなければならない。それは单子論にも違反するし、神の世俗化になり、最終的には現実の物質的解釈となる。②単子は非物質的な個体であり、本来原動力をもつので、それとは別に目に見えない物的空間を考えることはできない。人間の自由を認めるものは、同時に物的空間を決定要因として認めることはできない。③現実の空間を仮定することなく運動を説明することはできないし、また単子に宿る力を考えることはできないし、「ともに存在するものの秩序」とみられる適当な空間概念はえられない。

この3つの理由はいずれも行為中心の考察方法に結びつくが、この出発点そのまま大きく発展したとみることはできない。ライプニッツは実体空間の概念のもつ多くの問題点に注目したが、それはいかなる空間もそれ自身では存在しえないことを示したものであった。その場合には、経験的概念としての空間は否定されねばならず、空間的発想がいかなる経験の上に生ずるのかが問題となる。彼の「一緒にいる (Beisammen)」という経験では不十分である。ライプニッツはニュートンよりも人間の決定能力や行為能力を認めているが、それは、上述のように、「神によって前もって与えられたもの」のなかでだけいいうることである。彼は一般に近代的空間概念を用意したと評価されているが²³⁾、行為主体を現実の中心の構成者とみたわけではなく、その発想は不十分であった。彼は前近代的空間概念の中心をなしてきた実体的存在論を打倒することにはなったが、近代的空間概念の代表者とみることはできない。

4) 「日常的地域化の社会地理学」に対する帰結

(1) **アリストテレスの空間概念** 彼の実体空間の概念では、要素の特性が全体ないし空間の特性と解釈される傾向があり、空間それ自体が生成力を持ち、因果的決定の要因となる。①空間を実体あるものとして存在論的にみることや、②自然的、人工的、精神的、社会文化的事実の間にみられる多様な存在論が混同することは、社会・空間関係の通俗的な唯物論的な性格を持ち、行為中心の空間概念とは一致しない。人間の構築物や人々の居住地の配置は、人間の決定による意図的・非意図的な結果ではなく、空間の生成力や決定力の表現とみる。オトレンバ (Otremba, 1961) の論文「空間の役割」のように、ローカ

ルな伝統は空間特性の表現として解釈される。文化や社会は人間行為の表現や結果ではなく、空間的に決定されたものと説明される。

(2) **デカルトの空間概念** デカルトは、実体と広がりをもつ個体の定義とを区別するとともに、全体に部分とは異なった状況が認められるときに実体空間を考える。そこでは、全体的社会の概念と実体空間の存在論との類似性が認められる。しかし、彼には論理的な方向転換がみられ、精神と身体とを区別し身体に対する精神の優位を認めたが、彼の構築概念のなかに有形空間 (körperlicher Raum) を取り入れている。空間は全体的構築物であり意識にとって与件であるが、有形の世界にとっては与件ではない。

物質性と意識との間の存在論的な区分は、アリストテレスの場合と類似して、自然的・有形なもの、人工的なもの、思考的なものに3分することになる。その結果、空間は独自の実体的状況を示すが、独自の生成力をもたないことになる。彼によると、空間はただ広がりをもった実体であり、それはあらゆるかたちの精神的・社会文化的な地理的決定論を放棄することになる。

(3) **ニュートンの空間概念** 絶対空間・実体空間の重要性は、ニュートンの説明でも明らかである。形而上学的に規定された実体空間が意味をもつのは神学的論議においてであり、自然科学的な立証においてではない。人文地理学における自然決定論や空間科学的論議においては、実体空間が効力をもち、決定論的な空間作用の存在は自然界に限定されない。そこでは、自然界の状況や身近な条件、配置が合理的論議からはずされただけでなく、社会関係も除外されており、ラディカルな発想となる。人間のつくった物的施設の空間的配置は、意図的・非意図的な人間行為によるものではなく、空間作用の表現とみられる。

ニュートンによると、人間のつくった物的施設の空間的配置は人間行為の責任範囲ではなく、表面的には絶対空間・実体空間によるものであるが、空間は神の意志を介して作用するので、本質的には神の責任となる。この論議によると、人間活動は「空間の役割」によって決定されたものと理解され、社会については前近代的な見方が支配的である。ニュートンの絶対空間・実体空間に関する論議は神学的または形而上学的であり、絶対主義時代の世界観に基づくものといえよう。

(4) **ライプニッツの空間概念** 関係空間の概念にとって、空間はもはや経験科学の研究対象ではなく、むしろ個々の物的条件における諸関係が重要な意味をもつ。ライプニッツにおいてはこれらの諸関係に対応するのは单子であるが、「地域化の社会地理学」の観点からみた空間存在論では、彼の主張する单子論は導入する必要がない。ライプニッツにおいて第1に重要なことは、近代的な主体重視の方向がデカルトよりも大幅に前進しており、個人のもつ個性がこれまでになく重要視されたことである。第2には、神の領域とは別に、

決定能力をもつ主体の領域と単子の場としての生物領域（心をもつもの）とを区別したことである。この区分は、ヘーゲル以降の哲学内部論争において誤解をもって受け継がれ、地理学理論に関する論議には今日まで影響を与えている。

ライプニッツの単子論は、「解釈科学としての地理学」や「地域意識」を研究しようとするポールの提案やヘルダー（Herder, J. G. von）の解釈によって紹介された。今日の近代地理学も、具体的な地域や空間の研究も、原則的には単子論的であるとするポール（Pohl, 1986）の解釈論地理学（hermeneutische Geographie）²⁴⁾においては、社会文化的世界と無機物との間の差異を無視することによって関係空間は実体空間に立ち戻り、ライプニッツによる近代的主体の解放とは異なるものとなった。それは結局は、物的に決められた地域主義的全体主義を指向し、そこでは、唯物論的な考察方法や説明方法がみられ、自然条件の差異が民族文化や前近代的文化の地域差にとっての決定要因となった。

最近の地理学の「地域意識論争」における意識と空間の結合は、空間的に区切られた地域意識の発想を当然のことと認めることとなった²⁵⁾。①ヘルダーの民族的個性や、②ポールの地表組織の理解、③空間的地域意識の発想は、ライプニッツの関係空間概念や単子論を背景にもつものである。しかし、この3つの空間概念はいずれも、ライプニッツに代表される反実体的存在論においても、近代末期社会の社会存在論においても、支持することはできない。これらの構想は、実体空間の概念、全体主義的社会概念、決定論的傾向と前近代的な社会存在論の間に内部関連があり、発想の近親性があることをよく示したものといえる。解釈論地理学はたしかに、主体中心的な行為世界やその結果に関係したものである。

第4章 近代空間

あらゆる社会科学が日常生活の時空間的次元の研究に関与している今日、空間や時間もはや地理学や歴史学だけのものの特権的テーマとはいえない。しかも社会科学の間では、近代末期の社会存在論に関する基本的考え方の一致が要求されている。その場合に、近代に関して最も重要なことは、おそらく「主体中心の世界理解」であろう。主体中心的な認識では、表現する主体と表現される客体との間の明瞭な分離がみられる。ものの価値はもの自身の中にあるのではなく、ものを認識し行為する主体にあるので、主体の社会的習慣に基づく価値概念がものを表現するのである。すなわち、直接認識される客観的世界はなく、主体や主体的経験の変化が世界認識を変化させることになり、近代的生活様式を不確実なものにしている。地理学的観点からすると、主体中心のかつ将来を見通した客観的世界の経験や説明を進める必要性が真っ先に認識されるべきである。かつての神を中心と

する世界解釈は実用的な世界解釈に置き換えられ、絶対的立場は主体中心の相対的立場に移行してきた。

主体はそれぞれ独自の立場から世界を捉える。これまでの実体空間の概念は克服され、それに代わる概念としてライプニッツによる関係空間が出発点となったが、カントは実体空間の先験的解決を提案する。

1) カントの認識論的空間概念

従来のさまざまな空間概念の分析は、絶対空間と相対空間とに関係する。すなわち、①絶対空間と関係空間概念の中心にあるのは、ライプニッツが考えたように、空間はいかなる存在論によって説明されるのかという疑問である。つまり、空間はものなのか、物的個体とは異なった物的特性をもつものなのか、それとも空間は観念的概念に過ぎないのかという問題である。②ニュートンは神学的・政治的関心とは別に、物理学や自然界に妥当する空間概念について考えた。③空間の認識論的意義に関するものでは、空間的カテゴリーが認識にとっていかなる意義をもつのか、が問題となる。カントはこれら3つのテーマを結合させ、それとの関連において論じた初めての哲学者であった。

(1) 絶対空間と関係空間の概念的関係 カントは『純粋理性批判』(1781年)において、認識論的空間概念を決定的に変更した。それは、空間とは何かか自然科学にとって適切かという問題ではなく、時間と空間が認識過程においていかなる役割を果たすかという問題であった。カント(Kant, 1755)はニュートンとライプニッツの見解を統合することに努力した。ライプニッツは、「ともに存在する個体の秩序」の表現として空間や空間的關係の観念性を強調し、物的条件の間の相互作用を重視する。しかし、カントはライプニッツとは異なって、物体の因果的依存関係を個体のもつ本来の特性とは考えない。

カントは、実体空間の概念を放棄するとき、自然界はまとまりをもった個体からなり、しかも空間はいくらでも分割可能であると考え。とすると、そこから次の4つの結果がえられる。①空間は関係的・観念的に把握されるだけであり、個体間の関係の表現として理解される。②個体は活動中心として把握され、その内在する力に基づいて相互作用をする。③個体の分布は、各個体の物的な広がりによるのではなく、強弱のある個体の力に関係する。④空間の規模は、広がりの方ではその力の強度の表現といえる。

かくして、実体空間概念は放棄され、空間存在論は物的ないし現実的な存在から観念的なものへと移行する。カントが、個体のある意味で活動中心と考え、個体の識別をもつばらその広がりによるとしなかったことは、「地域化の社会地理学」にとって重要な意味をもつ。それは、行為中心の社会地理学が実体空間の概念とは一致しないことを意味するものである。

カントは1769年の著書『空間における地域差の第1原因について』のなかで、絶対空間の存在にとっての——物理学の発展との関連において——決定的理由を発見したと信じ、それによって関係空間を非難した。しかしやがて、絶対空間の証明には直観が必要であることに気づいて、コペルニクスの転回を試みた。それは、自然科学の論議とは異なった新たな次元を開拓し、空間は人間の認識に関する基本問題であるとした。カントにとって、空間は「経験の可能性をもつ条件」（共存在を秩序づけるための条件）であり、ある意味ではライプニッツの空間概念に近いものであった。すなわち、空間は自己の作用力をもつ独立の対象ではなく、経験を可能にする1つの条件である。したがって、もはや空間の本質を求めるのではなく、認識論のなかで空間の意義を求めることが重要となる。

(2) **新たな解決に対する哲学的基盤** カント哲学は「経験世界を超えた」という意味で批判的先験哲学 (kritische Transzendentalphilosophie) と呼ばれる。彼はあらゆる経験の前に存在する経験の条件を理性に基づいて明らかにしようとする。上述のように、空間も直観の1形態として把握され、認識プロセスにおける用具として利用される。

(3) **カントにおける空間問題の解決** カントによると、空間と時間は他のものをもって代替することのできない基本的な前提であり、「空間は経験的概念ではなく、アприオリに（経験に先行して）存在する。空間は論証しうる一般的概念ではなく、外部現象とは無関係に存在する」。それはむしろ1つの直観的見方であり、外部対象物の認知は空間イメージを前提とする。空間イメージは無限であり、無限量のイメージをもちうるものである。空間という対象物が存在するのではなく、むしろ対象物認知の1つの様式である。このような考えは、実体空間や関係空間の概念とは相容れないことになる。空間が知覚の対象とならないことは実体空間の概念と対立するし、空間が共存在的事実として定義されないことは関係空間とも対立する。

(4) **批判的論議** カントは『純粹理性批判』(1781年)の発表以前においては、空間の考察において絶対概念と関係概念の間を常に揺れ動いていた。カントが『純粹理性批判』以前の著書において個体が自己の運動能力をもつとしたことは、関係的空間概念を押しつけることになった。しかしそれと同時に、空間自身は作用者としては受け入れられない。そのように、作用や相互作用の原因が個体の特性以外に求められるときには、実体的概念が考えられる。カントの場合にも、空間は神の感性 (Sensorium Gottes) と解釈されたが、神はものではないので、この論議は誤りである。カントがライプニッツのように、関係空間概念を個々の固体の自律性と関連づけて説明するのは、行為中心の社会地理学にとって重要なことである。しかしその場合には、因果的に作用する実体空間は常に外部コントロールと関係することになり、それは行為能力をもつ主体の発想とは異なる。したがって、カ

ントが認識論的概念に向かってコペルニクスの転回をしたことは注目に値する。空間を絶対空間の把握と直接的に関連づけて、観察のなかに含められねばならないとする発見も注目される。しかし、行為中心的社会地理学をア priori に与えられた空間概念と関連づけることについては若干問題がある。

彼の空間は、ヒューム (Hume, D.) やロック (Locke, J.), ニュートンらの経験主義者のそれとは異なって、経験的・経験記述的な概念ではない。しかも、それは経験的概念でないばかりでなく、ア priori に与えられた純粹直観によるものであり、一般的な概念ではない。その点では、カントの空間概念はライプニッツらの合理主義者とも一致しない。行為理論においては、純粹に物理的でない事実は行為者の意図的・非意図的な行為結果として解釈されるが、カントの概念はこうした行為中心の見方とも対立する。カントの結論では、空間は対象物ではなくて対象物認知の1形態として考える²⁶⁾。つまり、空間は自己の作用力をもった独立の対象物ではなく、観念的概念であるとするのは、アリストテレスからニュートン、ライプニッツに至る見方とは大きな違いである。

2) 行為理論的な空間概念

第2章では、カント哲学が中心的役割を演じた啓蒙期の社会について論じた。批判能力をもつ主体は認識論の中心となるばかりでなく、技術や政策など決定力が要求される日常的世界においても重要な存在であった。近代の日常的現実、主体による創造の世界であり、そこには、合理的意図によって形成された人工的建造物の世界が広がり、近代末期の今日ではグローバル化が進展している。しかしそれはまた、意図しない行為結果の世界でもあり、リスクの高い危険な社会でもある (Giddens, 1994, S.59)。

ところで、これまでみた哲学的論議の歴史によると、空間は経験的空間科学の対象としての実体的存在ではなく、むしろ精神世界に属し、認知的性格をもつので、分析的にも存在論的にも異なった分野に適用できるかどうかの問題となる。存在論に関するもう1つ別の理解では、この空間概念は脱定着化メカニズムを考慮しなければならない。社会文化地理学の研究にとっても、近代末期の社会存在論的現実に適した説明のためには、前近代的な類型や判断への後戻りを阻止する空間概念が要求される。

(1) **カントとヘットナーの地理学** 実体主義者の主張とは異なって、空間は研究対象物ではなく、研究対象としての空間科学は成り立たない。したがって、経験科学としての空間科学的地理学も正当な学問とはいえない。このこととは別に、時間と空間はそれぞれの知識を組織的に規定するところから、カントは地理学を事物の整理による知識の増進に役立つ学問と考えた。彼の『自然地理学』(Kant, 1802, S.15)の序論には、「地理学以上に健全な人間理解をはかる能力をもった学問はない」と述べている。ただしその後追加して、

「この研究の利用は非常に広範で、われわれの認識の目的にかなった整理やわれわれ独自の楽しみに役立ち、社会的会話にも豊かな素材を提供する (S.20)」ものであるという。カントが1つの学問についてこのように詳しく発言するのは異例なことであった。

しかし、カントは地理学を独自の研究対象をもった純粹の学問とみていたわけではない。「(前略) 地理学による自然記述は、ものが地表上で実際に存在する場所を明らかにする。知識の概念区分では論理的区分と時間や空間による自然的区分とがある。前者の区分によって自然システムがえられ、後者を通じて地理的自然記述がなされる。地理学は、空間からみて同一時間内に起こる空間現象に関するものである。「世界は活動の舞台であり、その上でわれわれの歴史的活動が行われる。また世界は大地であり、その上でわれわれの知識がえられ、利用される」(Kant, 1802, S.9)。しかし多くの人々にとっては、土地や場所に関する新聞記事にはあまり関心がない。こうした「世界記述は世界知識の第1部」であり、彼は地理学を前座科学 (wissenschaftliche Propädeutik) と定義した。かくして地理学は、せいぜい大衆科学の段階にまでは到達することができると考えた。

空間が認識の対象でも原因でもなくアプリアリに認識され、認識の配置計画とみられる限りにおいて、この説明には一貫性がある。カントのこうしたコロロギッシュな伝統は受け継がれたが、ヘットナー (Hettner, 1927) が地理学をコロロギー科学 (chorologische Wissenschaft)²⁷⁾ と規定し、単なる前座科学の域から脱出しようとしたとき、カントの考えとの間には大きな差異が現れた。

ヘットナーの地誌学方法論はカントの発想に従ったが、それはカントの論議を不正確に歪んだかたちで受け継ぐことになった。ヘットナー (Hettner, 1927, S.115ff) は学問を体系 (systematisch) 科学と年代研究 (chronologisch) 科学、コロロギッシュ (chorologisch) 科学に区分したが、それは歴史学も地理学と同様に前座科学とみていたカントとは全く異なったものであった。ヘットナーは、「われわれはその経験的知識を概念によるかまたは時間・空間によって位置づけることができる」と述べており、地理学の役割を記述地誌や自然記述とみていたカントと大きく異なるものとなった。カントの体系的 (systematisch) という表現を、ヘットナーは概念的でなく物的 (dinglich) なものと解釈した。

ここでもう一度、ヘットナーのカントとの差異をまとめて示すと次のようになる。すなわち、①「概念的」を「物的」とみなしたことは、概念と対象物との差異が明瞭に区別されなかった前近代的社会によくみられた具象化の方向をたどることとなった。近代や近代末期においては、このような解釈の歪みは大きな問題となる。②ヘットナーのもとでは時間と空間は「もの」であり、地理学は経験的または事物的空間科学となった (Hettner, 1927, S.125)。③ヘットナーにとっては、空間や時間が因果的要因をもつものとして過度

に重要視され、アプリアリな存在としては理解されなくなった。

空間科学としての見方はその後バーテルスによって受け継がれたが、そこではコロロギー地理学の部分修正が加えられた²⁸⁾。ヘットナー (Hettner, 1927, S.267) は「人間の意志決定を黙殺することによって、人間の地理的事実は自然によって与えられた条件に還元される」とした。そこでは、主体的解釈や主体に関する目的設定や社会存在論的な特異性は、空間科学的に規定された研究概念のなかではカテゴリーをもたなかった。しかし、社会地理学や文化地理学は近代末期の条件下においては、主体の生活条件に関する意識の説明を重要視すべきであり、空間に関する新しい解釈や存在論が必要である。空間を純粹に直観として理解するときには、自然界の対象物はただ広がりを示すだけといえる。純粹に直観形態としての空間は、知覚組織のなかでその特性が考慮されることになる。ここで英語圏の研究を少し紹介しよう。

(2) 空間から空間性へ？ バティマーによって空間科学的研究に対する現象学的批判がなされた後、新たな空間概念に関する多くの研究が発表された (Billinge et al., 1984; Sack, 1980a, 1980b; Cloke et al., 1991)。最初それらの研究は行動地理学的地理学の現象学版と結合し、その大部分は人間の行動様式に関わるよりも——たとえ客観的実体ではなく主体的に認知された形態であるとしても——空間に関するものであった。したがって、彼らが地理的空間研究を拒否したのは、単に形態を異にただけであった。アイゼル (Eisel, 1982, S.128) はこの「馴れたパラダイムへの回帰」を一種の拡散的円運動 (diffuse Kreisbewegung) と呼んだ。それは、表面的には地理学の永久的な革命運動とみられるが、その中心には常に同じ研究対象である空間が保持されており、研究内容については不変のままにとどまることを意味する。

これに対して、ピックルス (Pickles, 1985, p.154) は行動的方向に歪められた地理学の改革には賛成しなかった。彼は、現象学の研究方向は科学批判の武器とはなるが、空間研究を正当化することはできないとし、ハイデッガーによる実存主義現象学によるもう1つの新しい研究——空間に代わる空間性の研究——が人文地理学の新たな研究領域を形成するものと考えた。その研究目的は「人間存在の空間性」に適切な解釈と説明を与えることであった。この目的に対して礎石を提供したピックルスの研究は、後に英語圏地理学のなかで整理され、ポストモダン地理学の発展に利用されることとなった。

ハイデッガーにとって空間は、近代自然科学の意味における1つのパラメータ (媒介変数) ではない。空間は身体を仲介して生活活動に現れる「空間化 (räumen)」の成果であり、それは開放された場所のかたちにとどまる。その際、場所や空間の性質は規範的評価にとって——直接には影響しない——素質でしかない。しかも、カントとは反対に、空間

は主体の一部ではないし、主体は世界をニュートン的な容器空間にあるかのようにみえていない。空間は主体の中にはないし、世界も空間の中には存在しない。むしろハイデッガーにあっては、存在論的に正しく理解される主体は本質的に空間的なものであり、その存在様式を通して世界を空間化していくものである。

ピクルスは、人間の「作業することや使用すること」から空間的秩序が導出されるとするハイデッガーの考えを、空間性の決定に対する出発点とする。空間性の意義は、一方ではピクルスのように、身体を介した活動として理解されるが、もう1つはハイデッガーにとってより重要なものであった。彼は、アリストテレスに依拠して、用具はその特性に対応した場所を占めるが、それは行為過程の単なる表現ではなく、それにとってまさに本質的なものとする。彼にとっては空間性のそれぞれが人間存在の重要な側面である。

ピクルスは原則として、空間性の実存主義的存在論を地理学の空間理論に適合したものとみており、空間性は空間行動に基づいて調査されるべきであるとする。場所、空間、空間性の意義は、行為理論的にみると、活動やその結果としてだけ明らかにされる。ハイデッガーのこうした見方に逆らうと、近代末期の空間存在論や社会存在論がもつ問題点に突き当たる。つまり、近代末期の生活形態において中心的意味をもつ主体が除外され、場所の意義はもはや主体の構築行為によるものではなく、場所や空間が主体とは独立した意義をもつことになる。

第2章において近代末期の生活形態の説明を受け入れるときには、空間に代わって人間存在の空間性の研究を活動や行為と方法論的に関係づけることが、社会存在論的にはより適切なものとなるであろう。これに賛同すれば、空間性の研究が行為科学の対象となり、従来のように、社会の空間理論を求めることが地理学にとって主たる研究目的とはならないであろう。もはや関心の中心にあるのは場所の意味 (Bedeutung von Orten / Plätzen) ではなく、主体行為の標識学習 (symbolische Aneignung) の表現としての意義である。

(3) 行為と矛盾しない考え方 カントの地理学方法論の中には、行為と矛盾しない空間の考え方に役立つ重要な指摘が含まれている。彼は、空間を経験記述的概念でも純粋な形式概念でもなく、形式分類的概念であると理解する。日常的地理形成の科学的研究を目的とした「日常的地域化の社会地理学」の発展に関する多くの自己矛盾を避けるためには、次の4つの段階からなる方法が提案される。

①空間は常に1つの概念として理解される。カントは、空間をあらゆる現実の経験についての前提をなすものとみており、経験と無関係なものとしては認識していない。その場合に、空間は自然界と関係するので、自然界の関係が行為中心の見方においていかに説明されるかが示されねばならない。行為主体をなす個体は自然界 (広がりをもった世界) の要

素であり、身体を介した活動には身体が場所を占めることによって参加する。行為主体は主体的世界と自然界とを仲介するので、自己の身体的生活における自然界での経験が空間の認識となる。空間は経験的事実として概念的に把握され、カントのようにアプリアリには把握されない。

②今日では、表現されたものと1つの事柄を表現する記号との間には明白な差異があるので、種々の形態を対象として取り上げることは前もって避けられる。空間概念は経験記述的な概念でも論理的概念でもなく、われわれの経験を秩序づけ、構造的に考察する形式的枠組みとして役立つものである。われわれは空間概念を用いて行為における共存者やその特性を定めることができ、それによって秩序を正確に記述することができる。空間はそれ自身が対象物ではなく、広く分布する個体の形式的側面を把握させる概念であり、その意味において形式的であり類型的である。

③空間概念は常に自然界に属し、空間的広がりをもつ個体世界の現実の範囲に関係するだけで、意識という非物質的事実や間主観的に構成された社会文化的事実とは無関係である。その上、社会現象の記述や説明のために空間的カテゴリーを使用する場合には、社会を全体的にみるという欠点に目をつぶらなければならない。たとえば、「ローマ以南の人は働かない」という説明は、社会を無視した空間的観点から生ずる全体論的な説明であり、問題である。このように社会を均質的に解釈することは、伝統的社会の社会存在論の下ではそれほど重要でなかった問題である。

④かくして最後に、行為理論的社会概念という基本的公準が承認されると、社会的現実 は主体の行為によって分析される。その際、空間自体には地域形成力は認められないので、個々の行為について分析することが重要である。その場合に空間は、行為者の身体による行為や自然界の方向付けのなかで生ずる問題の概要説明として理解されるだけであり、空間や物質性 (Materialität) 自体が社会的事実を形成する重要な要因とは考えられない。それらは、特定の社会的条件における行為のなかで初めて意味をもつ。

3) 「日常的地域化の社会地理学」に対する帰結

これまでにみたように、近代的な空間把握の結果は、伝統的地理学や空間科学的地理学にとって特に重要な意義をもつことになる。今日では、空間は、認知される物的事実とともに存在する対象物でも、その背後に存在する対象物でもないことが明白となったので、いかなる経験的空間科学も絶対必要なものとしては認められない。そのため、上述のように、カントは地理学は科学ではなく前座科学にすぎないとみていたが、ヘットナーは空間科学の重要性を示すことに努力した。

第2章で述べたように、ヘットナーのこの大胆な企てがなりたつ可能性は、前近代的な

生活様式の定着性にあり、対象としての前近代的な空間の存在にあったわけではない。前近代的な生活様式においては、伝統が行為の方針や権限を担っていた。前近代的な空間存在論においては、実体空間の強大な作用力が主体に対する考慮を著しく限定的なものとした。これに対して、近代末期においては、空間科学的な地理学の適応能力はきわめて低いものとなった。空間科学的マニュアルでもってある地表断面について集中的に調査し、できるだけ正確に研究することは重要性を失った。地球全体をくまなく解明しようとする発想も時代遅れなものとなり、母岩の性質から宗教に至るまで総合的に地域区分を行うことは、ますます意味を失ってきた。科学的空間研究として地理学を理解しようとするヘットナーの提案は、計量的空間科学として地理学を構築しようとした場合と同様に、持ちこたえられないものとなった。それは、ヘットナー地理学も計量的空間地理学も近代末期の生活条件に適合していないし、対象物として空間の具象化を前提とするからである。

しかしながら、前座科学と考えられていた記述的地域地理学の意義は、日常的観点からみると、グローバルな生活関係のなかでも過小評価することはできない。さらに、科学的地理学が近代末期の生活条件や生活形態のなかで、時代遅れなものになっているとはいえない。むしろその逆である。地理学は、近代ないし近代末期の生活様式や社会形態の原理を考慮することによって、テーマ的にも概念的にも、「近代の成果」の中核部分に関わることになりうるであろう。現実説明や現実計画の中に自然的・物的行為の状況を含めることによって、空間を近代的存在論と関連づけることは、形式分類的概念からして重要戦略と考えられるからである。空間に代わって行為が中心概念となるとき、実体空間の秩序が人間行為の必要条件や結果として重要となることは明らかである。この意味において、空間は行為の実現や社会的コミュニケーションの問題などにとって1つの略語 (Kürzel) である。その場合に、特定の問題提起にとって、略語という意味において空間的カテゴリーを用いて社会を説明するのは適当なことである。

将来展望

この論議によると、近代の原理と地域地理学的ないし空間科学的な方法論の原理とに同時に賛同することはできない。というのは、①近代末期には生活様式の脱定着化が進行しているので、それを空間的カテゴリーのなかで適当に説明することはできないし、②実体的対象空間は主体の意図や解釈のポテンシャルとは一致しないからである。伝統的生活様式の説明においては、社会地理学や文化地理学、経済地理学が強い説得力をもちえただけでなく、それらの研究は、哲学的空間論争や社会存在論に対応しながら、主体的活動を強く指向することになった。

地域地理学や行為の諸条件に関する空間的説明は、たしかに重要で意味あるものである。しかし、これを学問として理解しようとする、社会的観点においても空間的観点においても、前近代的存在論に頼ることになる。それに反して、近代原理においては、この前座的分野としての成果は主体的生活様式に関して十分に解釈することができない。

英語圏地理学者は「地理学の重要性 (geography matters!)」を確信しているが²⁸⁾、その重要性は今日一般に考えられている以外の意味においても認められる。すなわち、地理学は「ものの地理」やその関連物に関する説明形態としてだけでなく、日常的地理やそれと結びついた主体の自己解釈にとっての現実構造の部分としても重要である。日常生活の現実と学問的説明との間には溝があるが、その溝は近代末期の条件の下では地理学の実用性を害するものとなる。したがって、日常的地理形成の研究によって、その溝をできるだけ小さくする方向に向かうべきである。それは、伝統的地域地理学から生活世界に関する「日常的地域化の社会地理学」への変更を意味する。社会問題の克服のために行われる空間カテゴリーや空間状況の社会的利用に関する調査は、特に関心のあるところである。

こうした条件の下で、空間や空間性そのものを研究し説明し計画し理解しようとしても、それほど大きな成果は期待されないであろう。それよりも、いわゆる空間問題が行為の問題としてとりあげられ、地理的事実が不変のものとして理解されるのではなく、現実に主体にとってそれぞれ異なった意義をもった成果として理解されるべきである。われわれのなすべきことは、日常を複製したり再生産することではなく、これまで注目されなかったわれわれの日常的行為や学問的行為の意味づけやその結果に注目するように努力することである。

III. 本書を読んで——むすびにかえて

本書の前半では、方法論的主体主義の立場を明かにした後、ギデنزの構造化理論による近代末期社会の社会存在論について詳しく説明する。そして、後半ではアリストテレスからカント、ハイデッガーにいたるまで哲学者の空間概念を検討しその発展過程を考察した後、ヘットナーの地理学体系を問題としてとりあげている。そのなかで、空間自体を地理学の対象とするのは今日の社会存在論に適合しないので、主体行為の研究に改めるべきであるとするヴァーレンの主張は評価できる。しかし、ヴァーレンの主張はかなりラディカルな側面をもつだけに、多くの批判がある（森川，2000, 2001）。ブロットフォージェル（Blotevogel, 1999）にみられるように、空間概念の社会存在論への適合についても異論が全くないとはいえない。空間性概念のドイツ語圏地理学への導入については評価できる

が、日常生活の主體的行為に付随した空間性が地域に代わるべき重要な概念であるとは考えにくい。「日常的地域化の社会地理学」は新興の地域地理学を少なくとも補完する位置にある新たな地理学の分野であるとするヴァーレンの主張に、多くの地理学者が同調するとは思えない。

本書の最終章「将来展望」においては、「今日、日常生活の現実と学問的説明との間に開いた溝は、近代末期の条件の下では地理学の実用性を害するものとなっているので、日常的地理形成の研究によって、その溝をできるだけ小さくすることが必要である。それは、伝統的地域地理学から生活世界に関する『日常的地域化の社会地理学』への変更によってなされたもので、社会問題の克服のために実施される空間カテゴリーや空間状況の社会的利用に関する調査は、特に関心のあるところである」と述べている。ヴァーレンは実証研究として『日常の地理—実証的調査結果』と題する本書の第3巻を用意しているが、当初の予定より大幅に遅れている³⁰⁾。「日常的地域化の社会地理学」の方法論を用いた実証研究が公けにされ、その方法論が多くの地理学者の賛同をえられるならば、本書の評価はさらに高まるであろう。

各章の終わりでは「日常的地域化の社会地理学に対する帰結」というまとめがあり、ヴァーレンの主張する「日常的地域化の社会地理学」との関係が説明されている。しかし、モイスブルガー (Meusbürger, 1999) が指摘したように、地理学にはなじみのない術語が多く使用され、理解しにくい面がある。

[付記]

本稿の執筆のためにご教示をいただいた Blotvogel, H. H. 教授 (デュースブルク大学) と Werlen, B. 教授 (イエーナ大) に対し、また、独文レジメを校閲していただいた広島大学の Funck, C. 助教授や有益なご指摘をいただいた地誌研センター編集委員に対し、厚くお礼を申し上げます。本報告には2000・2001年度科学研究費基盤研究C「人文地理学における地域概念の再考」(12680085)の一部を使用した。

注

- 1) しかし、それほど大幅な変更は認められない。以前よりも小さい活字を使用し若干部分を短縮化したため、ページ数は262ページから256ページへと減少しており、注が一括して巻末におかれ、人名索引も付けられている。正字法的欠陥をなくし、文章表現が改善されている。内容的には、方法論的主体主義を一層明確に規定したといわれる (ヴァーレン教授のメールによる。2001年3月26日)。
- 2) それは自然条件との関係を特に重視した点にあると理解する。
- 3) 彼の発表に対しては非常に厳しい反応があり、英語圏以外の大学卒業者は重要視されない傾向から、

完成原稿を投稿する気になれなかったといわれ (Werlen 教授からの2002年1月16日のメールによる), The Professional Geographer や A. A. G. にはなんらの記事も掲載されていない。

- 4) 英語圏の新しい地域地理学については森川 (1998) を参照されたい。
- 5) ギデンズ (1993, pp.35-44) では脱埋め込みと訳されている。脱定着化とは、抽象的システムに基づく制度のなかで、社会生活がローカルな状況やその再ローカル化から分離することであり、マスコミや国際市場を通じてのわれわれの経験では、見かけ上離れた事件が直接影響することが多いことになる (Entrikin, 1994)。
- 6) 「地理の終焉 (end of geography)」も同様な意味をもつものと考えられる。
- 7) 行為と構造とが不可分に結びついていることをさす (ギデンズ, 1993, p.245)。
- 8) 「個人主義」は社会の原子主義的見方を思いつかせるので、方法論的個人主義に代わって方法論的主体主義という表現を用いる。したがってここでは、「個人的」よりも「主体的」な側面が重視される。「主体的」は個人のもつ一回性とか完全独立性を主張しない。それでもって社会的決定論に陥ることなく社会の特性が考慮されることになる (ヴァーレン教授のメールによる。2001年3月26日)。
- 9) このように、すべてを個人の行為に還元するのはラディカルな発想といえないか (Blotvogel, 1999, Meusburger, 1999, 森川, 2001)。
- 10) 社会地理学や文化地理学は以前から存在していたことからすると、ヴァーレンがこのように説明する意図が筆者には理解できない。
- 11) フクヤマ (Fukuyama, 1992) は「歴史の終焉」を主張する。ポストモダン社会では展望に対する統一性の喪失により一般的に妥当する説明の可能性が失われるからである。
- 12) ポストモダニズムは1980年代に文化地理学や経済地理学、地理学理論、地理哲学などに影響を与えたが、ポストモダンとして統一した理論をもつわけではない。ポストモダン認識論は、理論が現実反映しうるといふモダンの考え方をやめ、理論構築の偶然的・仲介的な性格を強調し部分的な相対主義的な見方と置き換えようとするものである (Dear, 1994)。
- 13) ギデンズ (1993) pp.53-63 を参照。哲学では反省と訳す。
- 14) 空間的にも時間的にも不在の人と相互作用を行い、空間を超えた相互作用の拡大や時間を超越した相互作用の収斂を意味する (Giddens, 1981)。ギデンズの構造化理論では基本的に重要な概念である。英語では time-space distanciation と書き (Johnston et al. eds., 1994, pp.630-633), ギデンズ (1993, p.30) では「時間と空間の分離」と訳されている。なお、ジョンストンらの地理学辞典第3版 (Johnston et al., 1994) には時間・距離短縮 (time-space compression) や時間・距離収斂 (time-space convergence) などの類似概念がある。
- 15) ヴァーレンもギデンズに従って近代と前近代との対比を重視しているが、より重要なのは、近代と近代末期との関係や近代社会の中における近代末期社会の位置づけではなかろうか (森川, 2000, 2001)。少なくとも空間関係においては、近代末期とそれ以前の時代との間には大きな差異がある。
- 16) グローバル化と地域主義の発展とは弁証法的関係にあるといわれているが、国家主義の発展については疑問視される。
- 17) ギデンズ (1993) p.36 を参照されたい。
- 18) ヴァーレンはフランスのマルクス主義哲学者ルフェーブル (2000) の『空間の生産』には注目していない。
- 19) ヴァーレンは哲学者の空間概念だけをとりあげ、リッターら地理学者のそれを全くとり上げていない。
- 20) しかし、物質には粗密があるので、それによって広がり異なるし、長さや幅、深さのなかに広がりが見られるところでは個体ではなく空の空間があるとも考えられ、異論もある。
- 21) ヴァーレンは、意識内容は自然界の空間には存在しないと考えるを貫き、プロートフォーゲルら (Blotvogel et al., 1987) の地域意識研究に反対する。
- 22) ニュートンの自然科学的意図と神学的意図との間には強い関係がみられる。近代初頭の科学者の多くが神学的発想を引きずっており、19世紀のリッターにそのような思想がみられるとしても、不自然なものとはいえないであろう。
- 23) たとえば、ヴァイヒハルト (Weichhart, 1996) はライプニッツの功績をもっと高く評価しているよ

- うに思われる。
- 24) ドイツでは humanistic geography が解釈論地理学の名でもって呼ばれる (プロトフォーゲル教授のメールによる。1999年10月20日)。
 - 25) プロトフォーゲルら (Blotevogel et al., 1986, 1987) の研究をさす。
 - 26) ライプニッツは空間を観念的なものとしたが、カントはそれを超えて、対象物のない空間 (Raum ohne Gegenstände) を考える。
 - 27) 地表の地域的差異 (areal differentiation) に関する研究であり (Johnston et al. eds., 1994, pp.64-65), ヘットナーの空間的分布論 (räumliche Verbreitungslehre) である。その考察においては自然条件との関係が重視された。
 - 28) その第3段階では空間法則が発見され、距離要因によって社会の空間的説明がなされるべきであるとする。
 - 29) Massey and Allen, eds. (1984) を指すものと思われる。
 - 30) ヴァーレン教授のメール (2001年9月29日) によると、2001年10月頃の刊行予定はさらに遅れるようである。

文 献 (以下の文献のほとんどは未見である)

- アンソニー・ギデンズ (松尾精文・小幡正敏訳) (1993):『近代とはいかなる時代か?—モダニティの帰結』而立書房。(原著は Giddens, A. (1990): *The consequences of modernity*. Sanford. ドイツ語訳は Giddens, A. (1995): *Konsequenzen der Moderne*. Frankfurt. a. M.)
- 森川 洋 (1998):『英語圏諸国における地理学の研究動向—地誌学を中心として—』総合地誌研究資料センター。
- 森川 洋 (2000):ベノ・ヴァーレンの地理思想—『日常的地域化の社会地理学:グローバル化, 地域, 地域化』を中心として—。地誌研年報9, pp.91-128
- 森川 洋 (2001):ドイツにおける行為重視の社会地理学—モイスブルガー編著の紹介。地誌研年報10, pp.103-136.
- ルフェーブル, H. (斎藤日出治訳・解説) (2000):『空間の生産』青木書店。(Lefebvre, H. (1974): *La production de l'espace*. Paris.)
- Bartels, D. (1970): Einleitung. Bartels, D. (Hrsg.): *Wirtschafts- und Sozialgeographie*. Köln/ Berlin, S.13-48.
- Billinge, M., Gregory, D. and Martin, R. eds. (1984): *Recollections of a revolution. Geography as a spatial science*. London.
- Blotevogel, H. H. (1999): Sozialgeographischer Paradigmenwechsel? Eine Kritik des Projekts der handlungszentrierten Sozialgeographie von Benno Werlen. Meusbürger, P. (Hrsg.): *Handlungszentrierte Sozialgeographie*. Benno Werlens Entwurf in kritischer Diskussion. Erdkundliches Wissen 130, Franz Steiner Verlag: 1-33.
- Blotevogel, H. H., Heinritz, G. u. Popp, H. (1986): Regionalbewusstsein. Bemerkungen zum Leitbegriff einer Tagung. *Ber. z. deutsch. Landesk.*, 60, S.103-114.
- Blotevogel, H. H., Heinritz, G. u. Popp, H. (1987): Regionalbewusstsein—Überlegungen zu einer geographisch—ländeskundlichen Forschungsinitiative. *Inform. z. Raumtw.*, H.7/ 8-1987, S.409-418.
- Blau, P. M. (1977): A macrosociological theory of social structure. *American Journal of Sociology*, 83, pp.1-35.
- Bourdieu, P. (1985): Sozialer Raum und Klassen. Bourdieu, P.: *Sozialer Raum und 'Klassen'*. *Leçon sur la leçon Zwei Vorlesungen*. Frankfurt a. M., S.7-46.
- Buroker, J. V. (1981): *Space and incongruence. The origin of Kant's idealism*. Dordrecht.
- Buttimer, A. (1976): Grasping the dynamism of lifeworld. *Annals of Association of American Geographers*, 66, pp.277-297.

- Buttimer, A. (1984): *Ideal und Wirklichkeit in der Angewandten Geographie*. Münchner Geogr. Hefte, 51.
- Cloke, P., Philo, C. and Sadler, D. (1991): *Approaching human geography. An introduction to contemporary debates*. London.
- Dear, M. (1994): Postmodern human geography. A preliminary assessment. *Erdkunde*, 48, S.2-13.
- Derrida, J. (1976): *Die Schrift und die Differenz*. Frankfurt. a. M.
- Eisel, U. (1982): Regionalismus und Industrie. Über die Unmöglichkeit einer Gesellschaftswissenschaft als Raumwissenschaft und Perspektive einer Raumwissenschaft als Gesellschaftswissenschaft. Sedlacek, P. (Hg.): *Kultur-/ Sozialgeographie*. Paderborn, S.125-150.
- Elster, J. (1988): *An introduction to Karl Marx*. Cambridge.
- Entrikin, J. N. (1994): *Place and region. Progress in Human Geography*, 18-2, pp.227-233.
- Fukuyama, F. (1992): *The end of history and the last man*. London.
- Giddens, A. (1979): *Central problems in social theory. Action, structure and contradiction in social analysis*. London.
- Giddens, A. (1981): *Contemporary critique of historical materialism, vol.1: power, property and the state*. London.
- Giddens, A. (1991): *Modernity and self-identity. Self and society in the late modern age*. Cambridge.
- Giddens, A. (1994): Living in a post-traditional society. Beck, U., Giddens, A. and Lash, S.: *Reflective modernization. Politics, tradition and aesthetics in the modern social order*. Cambridge.
- Gregory, D. (1989): Areal differentiation and post-modern human geography. Gregory, D. and Walford, R. eds.: *Horizons in human geography*. London, pp.67-96.
- Habermas, J. (1988): *Theorie des kommunikativen Handelns*. 2Bde, Frankfurt. a. M.
- Hartke, W. (1956): Die "Sozialbrache" als Phänomen der geographischen Differenzierung der Landschaft. *Erdkunde*, 10, S.257-269.
- Hartke, W. (1962): Die Bedeutung der geographischen Wissenschaft in der Gegenwart. *Tagungsberichte und Abhandlungen des 33. Deutschen Geographentages in Köln 1961*, Wiesbaden, S.113-131.
- Hettner, A. (1927): *Die Geographie, ihre Geschichte, ihr Wesen und ihre Methoden*. Ferdinand Hirt, Breslau. (ヘットナー著 (平川一臣ほか訳) (2001) : 『ヘットナー地理学』 古今書院.)
- Jarvie, I. C. (1974): *Die Logik der Gesellschaft*. München.
- Johnston, R. J., Gregory, D. and Smith, D. M. eds. (1994): *The dictionary of human geography. Third edition*. Blackwell, Oxford.
- Kant, I. (1755): Principiorum primorum cognitionis metaphysicae nova dilucidatio. *Kants Werke. Gesammelte Schriften*, hrsg. von der Königlich Preussischen Akademie der Wissenschaften, Bd. 1, Berlin 1902, S.385-416.
- Kant, I. (1802): *Physische Geographie*, hrsg. von Rink, D. F. Th. Königsberg.
- Lyodard, J. F. (1986): *Das postmoderne Wissen. Ein Bericht*. Wien.
- Massey, D. and Allen, J. eds. (1984): *Geography matters! A reader*. Cambridge, Cambridge Univ. Press.
- Melucci, A. (1989): *Nomads of the present. social movements and individual needs in contemporary society*. London.
- Meusbürger, P. (Hg.) (1999): *Handlungszentrierte Sozialgeographie. Benno Werlens Entwurf in kritischer Diskussion*. Erdkundliches Wissen 130, Franz Steiner Verlag Stuttgart, 268S.
- Nerlich, G. (1876): *The shape of space*. Cambridge.
- Otremba, E. (1961): Das Spiel der Räume. *Geogr. Rundschau*, 13, S.130-135.
- Pickles, J. (1985): *Phenomenology, science and geography: spatiality and the human science*. Cambridge.
- Pohl, J. (1986): *Die Geographie als hermeneutische Wissenschaft*. Münchner Geogr. Hefte, 52.
- Popper, K. R. (1973): *Objektive Erkenntnis*. Hamburg.
- Pred, A. (1985): The social becomes the spatial, the spatial becomes the social: enclosure, social change and the becoming of places in the beautiful Swedish province of Skane. Gregory, D. and Urry, J. eds.:

- Social relations and spatial structures*. London, pp.337-365.
- Sack, R. D. (1980a): Conceptions of geographic space. *Progress in Human Geography*, 4, pp.313-345.
- Sack, R. D. (1980b): *Conceptions of space in social thought. A geographic perspective*. London.
- Urry, J. (1985): Social relations, space and time. Gregory, D. and Urry, J. eds.: *Social relations and spatial structures*. London, pp.20-48.
- Weichhart, P. (1996): Zur Ontologie von Gesellschaft und Raum—Benno Werlens Konzept einer Sozialgeographie alltäglicher Regionalisierungen. *Mitt. d. Österr. Geogr. Ges.*, 138, S.270-273.
- Werlen, B. (1995): *Sozialgeographie alltäglicher Regionalisierungen. Bd.1: Zur Ontologie von Gesellschaft und Raum*. Erdkundliches Wissen 116, Franz Steiner Verlag, Stuttgart. (1999年には *Zur Ontologie von Gesellschaft und Raum. Sozialgeographie alltäglicher Regionalisierungen, Bd.1*, Franz Steiner Verlag として再版)
- Werlen, B. (1997): *Sozialgeographie alltäglicher Regionalisierung. Bd.2. Globalisierung, Region und Regionalisierung*. Erdkundliches Wissen 119, Franz Steiner Verlag, Stuttgart.
- Wirth, E. (1979): *Theoretische Geographie*. Stuttgart.

Die Vorstellung des Buchs von Benno Werlen “Zur Ontologie von Gesellschaft und Raum”

Hiroshi MORIKAWA

Ziel dieser Arbeit ist es, das ziemlich radikale, aber bahnbrechende Werk von B. Werlen der wissenschaftliche Welt der japanischen Geographie vorzustellen. Das Buch entspricht dem ersten Band seiner Habilitation “Sozialgeographie alltäglicher Regionalisierungen”. Dieser Band setzt sich aus den folgenden vier Kapiteln zusammen: 1. Zur Ontologie gesellschaftlicher Tatsachen, 2. Traditionelle und spät-moderne Gesellschaften, 3. Prä-moderner Raum und 4. Moderner Raum.

In diesem Band beabsichtigt Werlen, in der geographischen Kultur- und Gesellschaftsforschung die raumzentrierte Suche nach dem Kulturellen und Sozialen durch die Klärung der räumlichen Bedingungen für die Konstitution der Gesellschaften und Kulturen zu ersetzen. Eine Modernisierung der Geographie bedarf nicht nur moderner Instrumente und Verfahren, sondern auch eines Forschungsgegenstandes, eines Forschungsinteresses, das in bezug auf moderne und spätmoderne Lebensbedingungen alltagsweltlich relevante Wirklichkeitsdarstellungen ermöglicht. Werlen fordert, dass man in der modernen Sozialgeographie die alltäglichen Prozesse der Regionalisierung aufgrund der Handlungen der Akteure wissenschaftlich analysieren soll. Bei einem revidierten methodologischen Individualismus sind aber die Akteure nicht Gruppen oder Organisationen sondern immer Individuen. Obwohl die handlungszentrierte Sozialgeographie von Werlen hauptsächlich aufgrund der von der Dualität Struktur und Handlungen charakterisierten Strukturationstheorie von A. Giddens, besonders beispielsweise mit Hilfe der Begriffe wie Entankerung, raumzeitliche Distanzierung, autoritative und alloкатive Ressourcen usw., erklärt wird, widerspricht Werlen nicht nur seinem substantialistischen Raumbegriff, sondern stimmt auch seinem Gedanken des methodologischen Individualismus nicht vollständig zu. Anhand der Analyse der philosophischen Raumbegriffe von Aristoteles über Kant bis zu Heidegger legte er mehr Wert auf die Räumlichkeit, die im Prozess der Handlungen in Erscheinung auftritt als die Region.

Es ist bemerkenswert, dass Werlen den Raumbegriff mit Bezug auf der Sozial- und Raumontologie der spätmodernen Gesellschaft erneut zu betrachten und erklären versucht und den Begriff der Räumlichkeit in die deutschsprachige Geographie eingeführt hat. Es ist jedoch sehr problematisch, dass er den Regionsbegriff gegenüber die Räumlichkeit deshalb nicht so als bedeutungsvoll angesehen hat, weil die Region heutzutage durch den Verlust der Homogenität ihre sozialontologische Grundlage verloren hat. Darüber hinaus hat er die gesellschaftliche Eigenart der Spätmoderne im Vergleich mit der Moderne nicht ausreichend erklärt, obwohl er die Differenzen zwischen traditionellen und spätmodernen Gesellschaften eingehend erklärt hat.

Schlüsselwörter: Raum, Region, Regionalisierung, Spätmoderne, Strukturalisationsthoerie